

西鹿渡遺跡

— 「M Stage 三本柳」宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書—

2018.3

廣瀬 忠夫
盛岡市教育委員会

西鹿渡遺跡

— 「M Stage 三本柳」宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書—

2018.3

廣瀬 忠夫
盛岡市教育委員会

例 言

1. 本書は、岩手県盛岡市^{さんぼんやなぎ}三本柳第2地割33番2地内に所在する^{にしかど}西鹿渡遺跡の第32次発掘調査報告書である。
2. 本調査は、宅地造成工事に伴い、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。野外調査は、平成29年5月15日から平成29年7月28日まで実施した。調査面積は、1,624㎡(対象面積2,843㎡)である。
3. 本調査は、地権者の廣瀬忠夫氏と盛岡市教育委員会との間で締結された協定書に基づき、盛岡市遺跡の学び館が野外調査及び出土資料整理並びに報告書編集を実施した。本調査に係る費用は、事業主体である廣瀬忠夫氏が支出した。
4. 発掘調査及び本書の編集・執筆は、盛岡市遺跡の学び館 菊地幸裕・今松佑太が担当した。
なお、野外調査及び資料整理には、次の方々が従事した(五十音順)。
及川 亜矢子, 長内 理恵, 小松 愛子, 佐藤 英恵, 西田 千佳, 袴田 英治,
樋口 泰子, 村上 幸子, 村上 美香, 山下 摩由美
5. 遺構の平面位置は、平面直角座標X系(日本測地系)を座標変換した調査座標で表示した。
調査座標原点 R X ± 0 ← X - 37,400.000 m
 R Y ± 0 ← Y + 28,600.000 m
6. 挿図中の高さは、標高値をそのまま使用している。
7. 挿図中の土層図は、堆積の状況を重視し、線の太さを使い分けた。土層註記は、層理ごとに本文で記述し、個々の層位については割愛した。
なお、層相の観察にあたっては、『新版標準土色帖』(2013 小山正忠・竹原秀雄)を参考にした。
8. 本書中の地図は、国土地理院発行2万5千分の1地形図「盛岡」「矢幅」及び「盛岡市都市計画整備図」(平成元年)を使用した。
9. 遺構の名称及び記号は次のとおりである。なお、「竪穴建物跡」の名称は、『発掘調査のてびきー集落遺跡発掘編ー』(2010 文化庁文化財部記念物課・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所)に倣っている。

遺構種別	記号
竪穴建物跡	R A
10. 土器の区分は、土師器・須恵器・あかやき土器に分類した。「あかやき土器」の名称は、ロクロ使用の酸化炎焼成土器(坏類, 甕類)に使用し、ロクロ使用の内面黒色処理の坏類は、「土師器」に分類した。
11. 遺跡全景空中写真撮影及び出土遺物実測図化は、(株)タックエンジニアリングが行った。
12. 本調査に関する出土遺物及び記録類は、盛岡市遺跡の学び館で保管・管理している。

目 次

例 言
目 次

I 遺跡の環境	1
1 遺跡の位置	1
2 地形及び地質	2
3 周辺の遺跡	3
4 これまでの調査	3
II 調査経過	6
1 調査に至る経緯	6
2 調査方法	6
III 遺構と遺物	8
IV まとめ	30

写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 西鹿渡遺跡 位置図	1
第2図 地形分類と周辺の遺跡	2
第3図 西鹿渡遺跡 全体図	5
第4図 西鹿渡遺跡 第32次調査区全体図	7
第5図 R A 044 竪穴建物跡	9
第6図 R A 045 竪穴建物跡	10
第7図 R A 045 竪穴建物跡 土器出土状況	11
第8図 R A 044・045 竪穴建物跡 出土土器	12
第9図 R A 046 竪穴建物跡	14
第10図 R A 046 竪穴建物跡 土器出土状況	15
第11図 R A 047 竪穴建物跡	16
第12図 R A 046・047 竪穴建物跡 出土土器	17

第13図	R A 048・049 竪穴建物跡 (1)	20
第14図	R A 048・049 竪穴建物跡 (2)	21
第15図	R A 048 竪穴建物跡 土器出土状況	22
第16図	R A 049 竪穴建物跡 土器出土状況	23
第17図	R A 050 竪穴建物跡	24
第18図	R A 050 竪穴建物跡 土器出土状況	25
第19図	R A 051 竪穴建物跡	27
第20図	R A 048 竪穴建物跡 出土土器	28
第21図	R A 049～051 竪穴建物跡 出土土器	29
第22図	西鹿渡遺跡・高櫓A遺跡・百目木遺跡 住居規模散布図(1)	31
第23図	西鹿渡遺跡・高櫓A遺跡・百目木遺跡 住居規模散布図(2)	32
第24図	西鹿渡遺跡 竪穴建物跡 カマド方位分布図	32

写真図版目次

第1図版	第32次調査区 全景
第2図版	R A 044 竪穴建物跡
第3図版	R A 045 竪穴建物跡
第4図版	R A 046 竪穴建物跡
第5図版	R A 047 竪穴建物跡
第6図版	R A 048 竪穴建物跡
第7図版	R A 049 竪穴建物跡
第8図版	R A 050 竪穴建物跡
第9図版	R A 051 竪穴建物跡
第10図版	R A 044・045 竪穴建物跡 出土土器
第11図版	R A 046・047 竪穴建物跡 出土土器
第12図版	R A 048 竪穴建物跡 出土土器
第13図版	R A 049～051 竪穴建物跡 出土土器

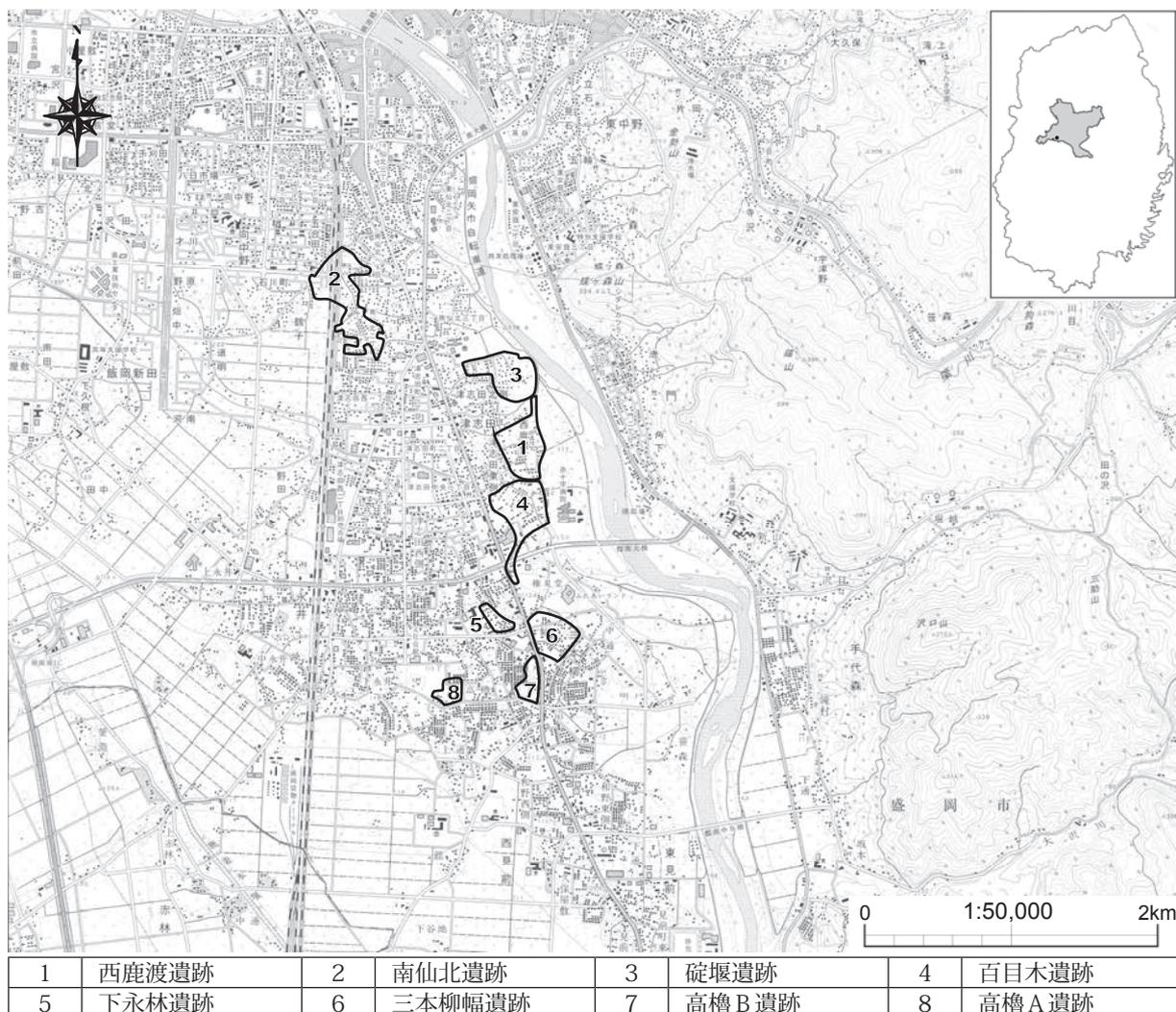
I 遺跡の環境

1 遺跡の位置

岩手県盛岡市は、県土のほぼ中央に位置している。市域の北側を岩手町・葛巻町，東側を岩泉町・宮古市，南側を矢巾町・紫波町，西側を八幡平市・滝沢市にそれぞれ接している。岩手県の県都として、人口約 30 万人，総面積約 886.47km²を測る。

西鹿渡遺跡は，JR 東北本線 仙北町駅から南東に約 2.5km，盛岡市三本柳第 2 地割地内に所在する。遺跡の北方約 0.6km には，盛岡第四高等学校が位置し，南方約 0.3km には，赤十字病院が所在する。遺跡の範囲は，北上川と国道 4 号線に挟まれた東西約 300m，南北約 400m で，北東端が突端状に突き出ている形態を呈している。

本遺跡及びその周辺は，かつては畑地や果樹園が多く点在していたが，近年は宅地化が顕著となり，本遺跡内のほとんどが住宅地である。今次調査地点は，宅地化されていない箇所で，現況は畑地である。

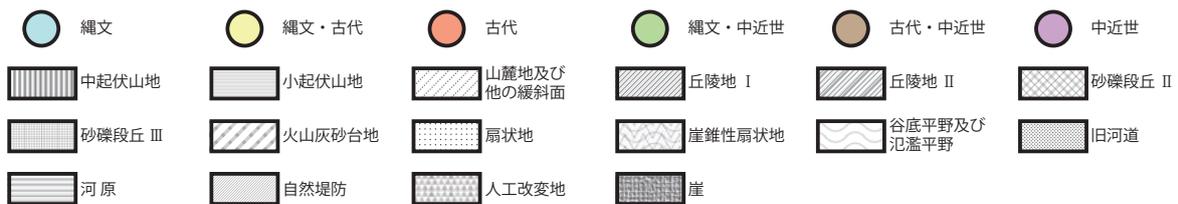
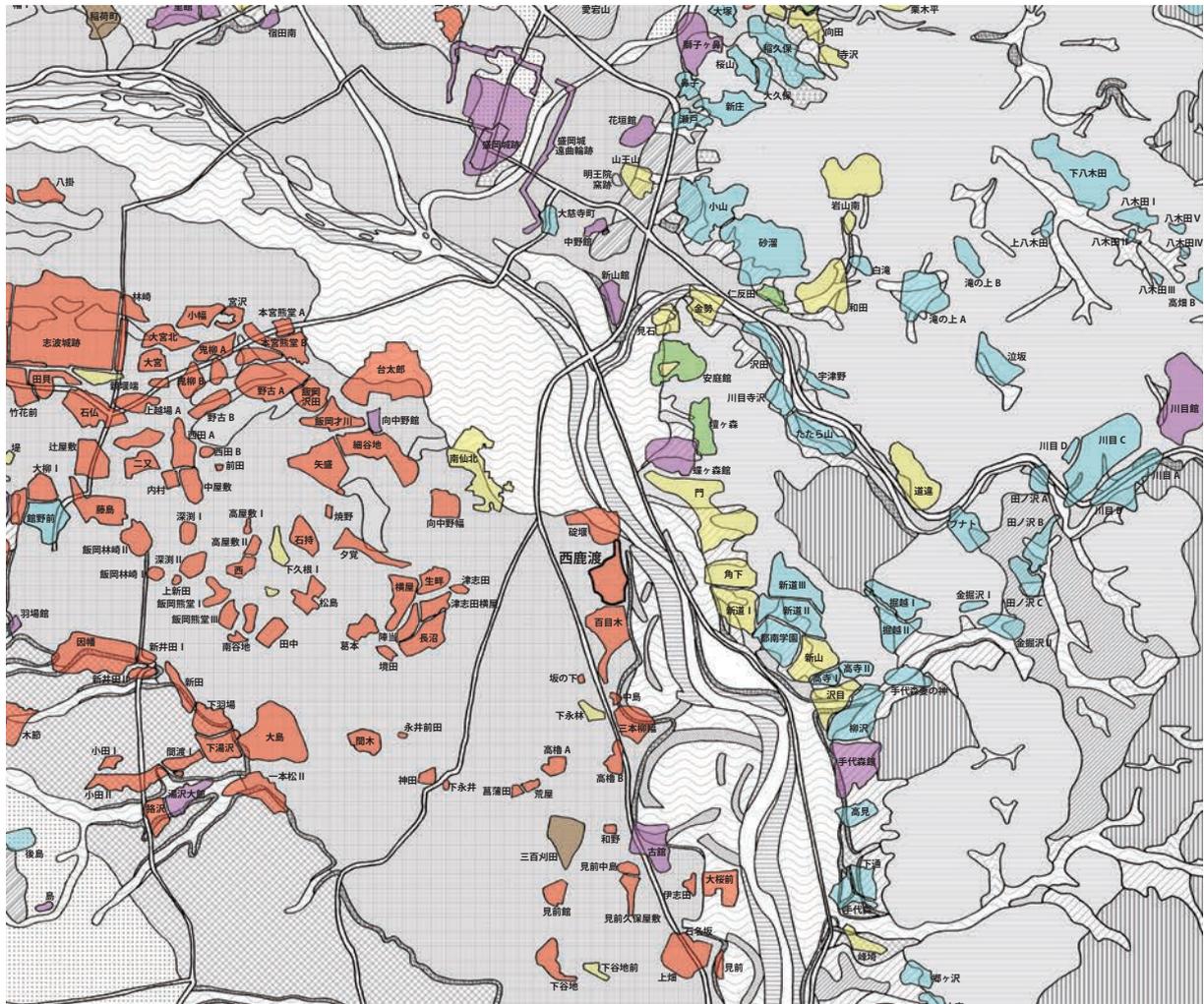


第 1 図 西鹿渡遺跡 位置図

2 地形及び地質

本遺跡の東側には東北地方最大河の北上川が縦断し、その兩岸には谷底平野が形成されている。北上川西岸では、さらに台地が広がっている。この台地は扇状地や旧河床が段丘化したものと考えられ、特に、中・低位段丘が広面積を占めている。本遺跡は、この低位段丘の北東端部に立地している。台地の西方には奥羽背陵山地の一部をなす東根山山地等が控えており、この東麓部には大規模な複合扇状地が発達し、段丘面へと移行している。一方、北上川東岸は、段丘の発達は不良で、小起伏山地の手代森山地や佐比内丘陵が広がっている。

北上川と本遺跡の北を西流する雫石川は流路の転換が顕著で、北上川西岸と雫石川南岸には細かい旧流路跡が網状に残存している。本遺跡もその旧流路に四方を画されている。



第2図 地形分類と周辺の遺跡

3 周辺の遺跡

盛岡市内には、旧石器時代から近世までの遺跡が所在しているが、このうち、本遺跡が所在する雫石川南岸から北上川西岸の区域には、古代の集落跡が数多く点在している。

本遺跡の南方約0.1km、旧河道を挟んで百目木遺跡が所在する。これまでの調査で、奈良・平安時代の竪穴建物跡が100棟以上確認されている大規模集落跡である。分けても昭和53年に行われた第1次調査は、大型ショッピングセンター建設に伴う事前調査として旧都南村教育委員会が実施したもので、奈良・平安時代の竪穴建物跡80棟、縄文時代の土坑6基等を検出し、当該遺跡が奈良・平安時代の大規模集落跡であることが判明した知見である。

本遺跡の南西約1.6kmには、高櫓A遺跡が所在する。平成16・18・21年の3ヶ年に隣接しあう3地点を調査した結果、奈良時代末から平安時代初頭の竪穴建物跡34棟をはじめとする遺構が検出された。竪穴建物跡のカマド方位は、北と北西が大勢を占め、該期の特徴を示している。建物跡の規模の観点からは、一辺5m以上の大型住居と中・小型住居がセットとなって集落を形成したことが窺え、この点においても該期の特徴が看取される。

本遺跡の南西約1.0kmには、下永林遺跡が所在する。古くより蝦夷塚の伝承がある地域で、昭和10年には、当地周辺で蕨手刀1振が出土している。大道西古墳とも呼称される遺跡である。平成28・29年の調査で、古墳の円形周溝11基が確認された。いずれも後世の削平により主体部は確認されなかったが、全容が判明しているもので、径約10mを測る。周溝埋土上層で確認された十和田a降下火山灰及び周溝内出土土器から、9世紀代の帰属が想定される。当該地域における墓域の存在を示唆する知見である。

4 これまでの調査

本遺跡は、昭和55年、旧都南村教育委員会が実施した第1次調査を嚆矢とし、今次調査まで、本調査13回、試掘調査19回を実施している。

第1次調査は、宅地造成工事に伴う事前調査として、昭和55年に実施した。調査の結果、奈良時代の竪穴建物跡1棟、平安時代の竪穴建物跡1棟、時期不詳の竪穴建物跡1棟等の遺構と、奈良時代の土師器 坏・甕、平安時代の土師器 坏・甕、須恵器 坏等の遺物が検出された。

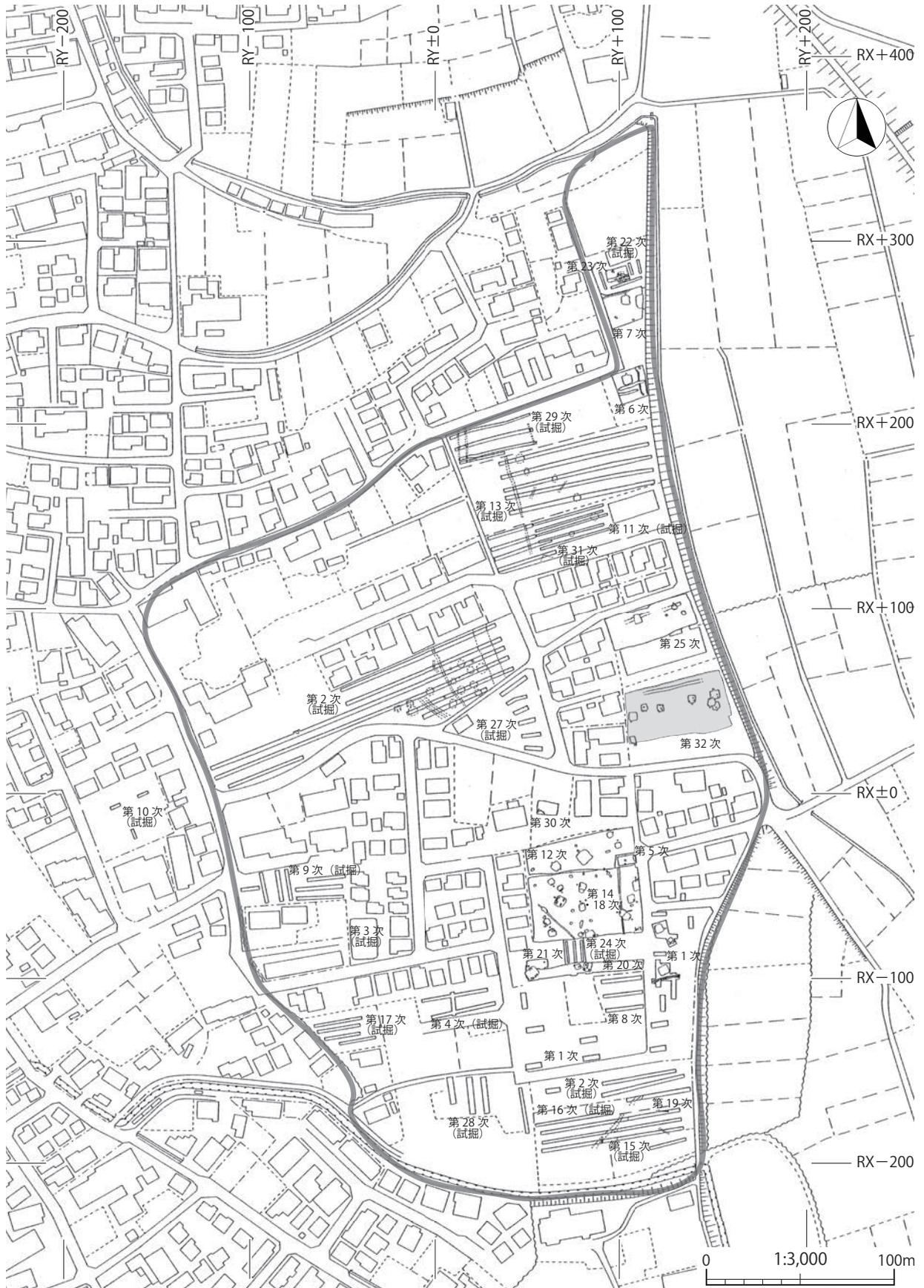
平成15年に実施した第18次調査は、宅地造成工事に伴う事前調査として、約2,200㎡を対象とした。その結果、奈良時代の竪穴建物跡13棟、平安時代の竪穴建物跡4棟等の遺構と、土師器、須恵器、土製紡錘車、鉄鏃等の遺物が確認された。

第25次調査は、本調査区の北隣に位置し、福祉施設建設に伴い実施したものである。調査の結果、奈良時代の竪穴建物跡1棟、平安時代の竪穴状遺構1基等の遺構と、土師器 坏・甕、あかやき土器 坏等の遺物が確認された。竪穴建物跡は、北西方向のカマドを有し、一辺約2.7mの小型住居であった。

本遺跡は、奈良・平安時代の集落跡と想定されるものの、従前の調査例は、試掘調査や個人住宅建築等に伴う小規模な発掘調査が大勢を占めているため、遺跡の様相については、明確にしえない部分が多い。さらなる類例の増加が待たれるところである。

次数	区分	所在地	調査原因	面積 (㎡)	調査期間	主な検出遺構
1	本調査	三本柳 2 地割地内	宅地造成	1,000	1980.7.20 ～ 8.14	奈良時代の竪穴建物跡 1 棟, 平安時代の竪穴建物跡 1 棟, 時期不詳の竪穴建物跡 1 棟
2	試掘	三本柳 2 地割 28-1,2	宅地造成	652	1993.8.18 ～ 8.19	奈良・平安時代の竪穴建物跡 12 棟, 土坑 4 基, 古代以降の溝跡 4 条
3	試掘	三本柳 2 地割地内	宅地造成	100	1993.6.16	遺構・遺物 なし
4	試掘	三本柳 2 地割 42-8 外	宅地造成	172	1993.12.20	遺構・遺物 なし
5	本調査	三本柳 2 地割 36-2	防火水槽建設	63	1994.9.1 ～ 9.3	奈良時代の竪穴建物跡 1 棟, 土坑 2 基
6	本調査	三本柳 2 地割 22-7	個人住宅建築	291	1995.7.4 ～ 7.11	奈良時代の竪穴建物跡 1 棟, 土坑 1 基, 時期不明の溝跡 1 条
7	本調査	三本柳 2 地割 16-5,6, 36	個人住宅建築	393	1995.8.18 ～ 9.5	縄文時代の土坑 1 基, 奈良時代の竪穴建物跡 3 棟, 土坑 3 基, 古代の溝跡 1 条
8	試掘	三本柳 2 地割 39-1	共同住宅建築	54	1997.11.11	遺構・遺物 なし
9	試掘	三本柳 2 地割 47-5	宅地造成	268	1997.11.28	遺構・遺物 なし
10	試掘	三本柳 3 地割 5-2	共同住宅建築	68	1998.2.12	遺構・遺物 なし
11	試掘	三本柳 2 地割 36-1,5	共同住宅建築	196	1998.8.17	平安時代の竪穴建物跡 2 棟
12	本調査	三本柳 2 地割 36-2,5,6	宅地造成	970	2002.10.1 ～ 12.2	奈良時代の竪穴建物跡 5 棟, 土坑 3 基
13	試掘	三本柳 2 地割 25-1	共同住宅建築	820	2002.7.23 ～ 7.25	奈良時代の竪穴建物跡 5 棟, 時期不明の溝跡 3 条
14	試掘	三本柳 2 地割 36-1,3,4	宅地造成	555	2002.7.29 ～ 7.31	奈良時代の竪穴建物跡 13 棟, 時期不明の溝跡 1 条
15	試掘	三本柳 2 地割 39-2 外	宅地造成・共同住宅建築	501	2002.11.25 ～ 11.28	古代の土坑 2 基, 溝跡 4 条
16	試掘	三本柳 2 地割 39-43 外	共同住宅に伴う擁壁設置	68	2003.4.14	遺構・遺物 なし
17	試掘	三本柳 2 地割 42-1	共同住宅建築	146	2003.4.16	遺構・遺物 なし
18	本調査	三本柳 2 地割 36-1,3,4	宅地造成	2,226	2003.6.2 ～ 8.2	奈良時代の竪穴建物跡 13 棟, 平安時代の竪穴建物跡 4 棟, 奈良・平安時代の土坑 17 基, 古代以降の溝跡 5 条, 時期不明の土坑 3 基
19	本調査	三本柳 2 地割 39-57 外	擁壁設置	70	2004.4.13 ～ 4.15	時期不明の溝跡 2 条
20	本調査	三本柳 2 地割 49-50～ 66	下水道敷設・進入路設置	320	2006.7.31 ～ 8.11	奈良時代の竪穴建物跡 2 棟, 竪穴跡 1 棟
21	本調査	三本柳 2 地割 49-50～ 66	個人住宅改築	62	2007.4.16 ～ 4.27	奈良時代の竪穴建物跡 1 棟
22	試掘	三本柳 2 地割 16-35	個人住宅建築	77	2009.3.18	平安時代の竪穴建物跡 3 棟, 土坑 1 基
23	本調査	三本柳 2 地割 16-35 外	個人住宅建築	80	2009.6.1 ～ 6.12	奈良時代の竪穴状遺構 1 基, 時期不明の土坑 3 基
24	試掘	三本柳 2 地割 39-64	個人住宅建築	43	2009.10.7	遺構・遺物 なし
25	本調査	三本柳 2 地割 32-1 外	福祉施設建設	750	2010.5.6 ～ 5.31	奈良時代の竪穴建物跡 1 棟, 平安時代の竪穴状遺構 1 基, 時期不明の竪穴状遺構 1 基, 土坑 1 基
26	試掘	三本柳 2 地割 33-2,3	宅地造成	367	2010.4.23	奈良時代の竪穴建物跡 4 棟
27	試掘	三本柳 2 地割 31-1 外	宅地造成	127	2012.6.15	遺構・遺物 なし
28	試掘	三本柳 2 地割 42-1 外	宅地造成	165	2013.5.9	遺構・遺物 なし
29	試掘	三本柳 2 地割 22-4～6	宅地造成	154	2014.4.30	遺構・遺物 なし
30	本調査	三本柳 2 地割 35-17	個人住宅建築	73	2016.4.27 ～ 5.24	奈良時代の竪穴建物跡 1 棟
31	試掘	三本柳 2 地割 26-3 の 一部	宅地造成	240	2017.4.11	奈良・平安時代の竪穴建物跡 1 棟, 古代以降の溝跡 1 条
32 (今次)	本調査	三本柳 2 地割 33-2	宅地造成	1,624	2017.5.15 ～ 7.28	奈良時代の竪穴建物跡 6 棟, 平安時代の竪穴建物跡 2 棟

西鹿渡遺跡 調査一覧



第3図 西鹿渡遺跡 全体図

Ⅱ 調査経過

1 調査に至る経緯

西鹿渡遺跡 第32次調査は、盛岡市三本柳第2地割地内において、宅地造成工事に伴って実施した記録保存を目的とした発掘調査（本調査）である。

調査対象地については、平成21年度に地権者の廣瀬忠夫氏から埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて協議があり、包蔵地に該当することから、平成22年3月10日に発掘届が提出された。これを受けて盛岡市教育委員会（以下「当委員会」という）では、平成22年4月23日に試掘調査を実施した（第26次調査）。その結果、奈良時代と想定される竪穴建物跡と土師器片が確認され、事業実施には本調査が必要である旨を回答した。その後、地権者側で調整が図られた結果、事業を実施することとなり、再度当委員会と協議した。協議により、事業対象区域約2,800㎡のうち、試掘調査で遺構が確認された範囲を中心とした約1,600㎡を発掘調査対象区域とし、緊急発掘調査を実施することになった。

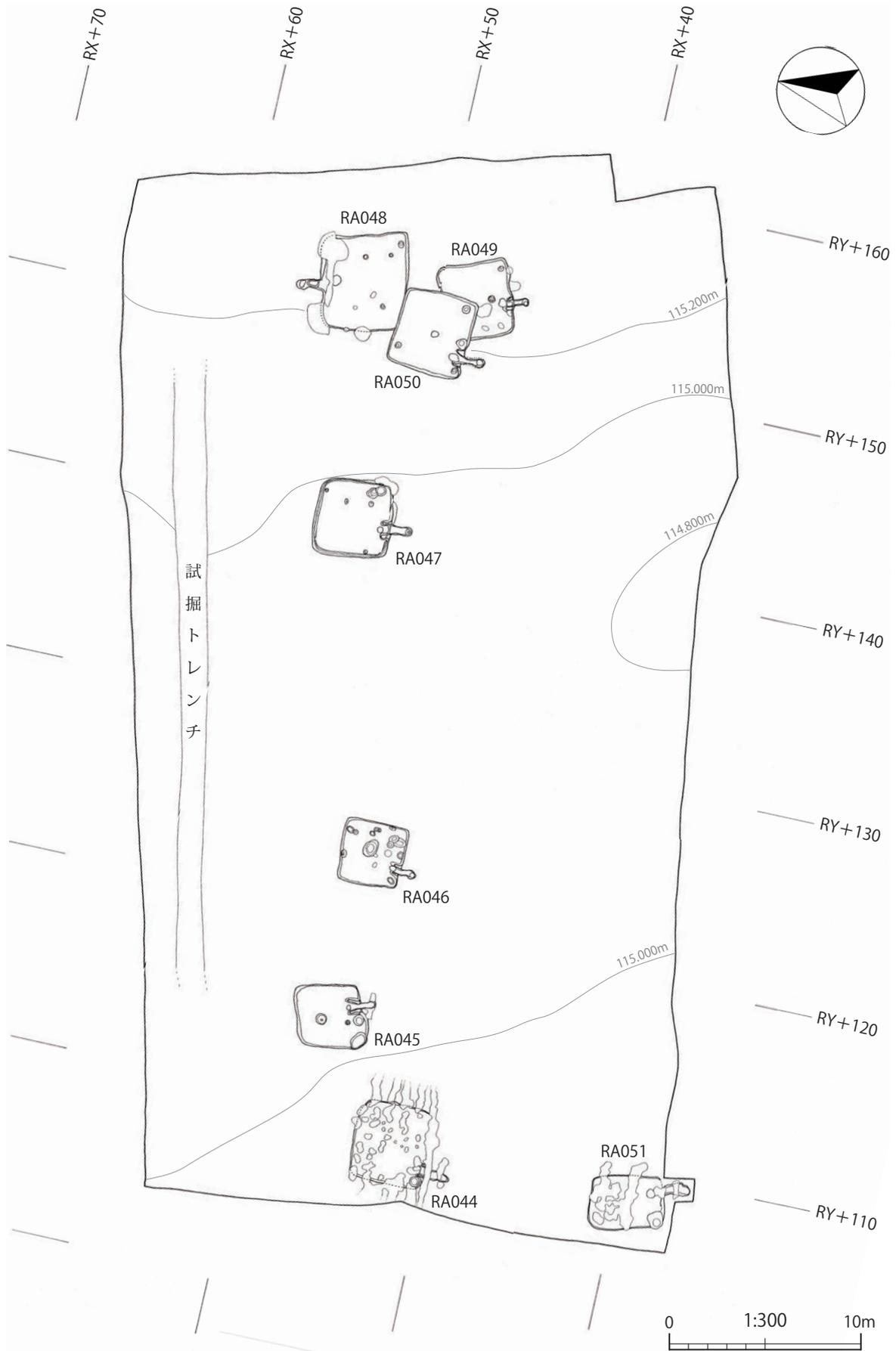
平成29年2月7日に発掘届が提出され、同年5月12日、発掘調査を受託された当委員会と事業主の廣瀬氏との間で、「埋蔵文化財に関する協定書」が締結された。これにより、発掘調査は当委員会が主体となり、調査に係る費用は事業主が負担することになった。調査は盛岡市遺跡の学び館が担当することになり、同年5月15日から開始した。

2 調査方法

本調査は、事業対象区域の中央部、試掘調査で遺構が確認された範囲を対象として実施した。調査面積は、1,624㎡である。

調査にあたり、本遺跡全域にグリッドを設定した。グリッドは日本測地系 平面直角座標 X 系の XY 両軸に沿い、50m を単位とした大グリッドを設定した。さらに大グリッドは、2m 四方の小グリッドで 25 × 25 に分割した。グリッド名は、南北軸を 50m ごとにアルファベット大文字、細分した 2m ごとにアルファベット小文字を、東西軸上を 50m ごとと、2m ごとにアラビア数字を付して、A1a1, B2b2, C3c3, …… と呼称していった。

調査は、重機を使用した表土の除去から開始した。表土除去の結果、調査区域の中央帯を中心に、竪穴建物跡が確認され、その精査に着手した。調査は、建物跡の主軸及び直交方向に土層観察用の畔（ベルト）を設定し、層の堆積状況を確認しながら進めた。建物跡内には、土層観察用ベルトを境に、方位を冠して、NW 区、SE 区、…… と呼称したエリアを設定し、そのエリア及び層位ごとに遺物を取り上げた。遺構外から出土した土器は、グリッドごとに取り上げて収納した。特徴的な土器や床面から出土した土器は、出土状況の図化及び写真撮影を行って記録したうえで取り上げた。遺構は床面まで掘り下げた後に、土層の堆積状況を図化及び写真で記録し、完掘した。完掘後、平面図の図化及び完掘状況の写真を撮影した。全ての遺構の調査終了後、地形測量及び空中写真撮影を行い、本調査を終了した。



第4図 西鹿渡遺跡 第32次調査区全体図

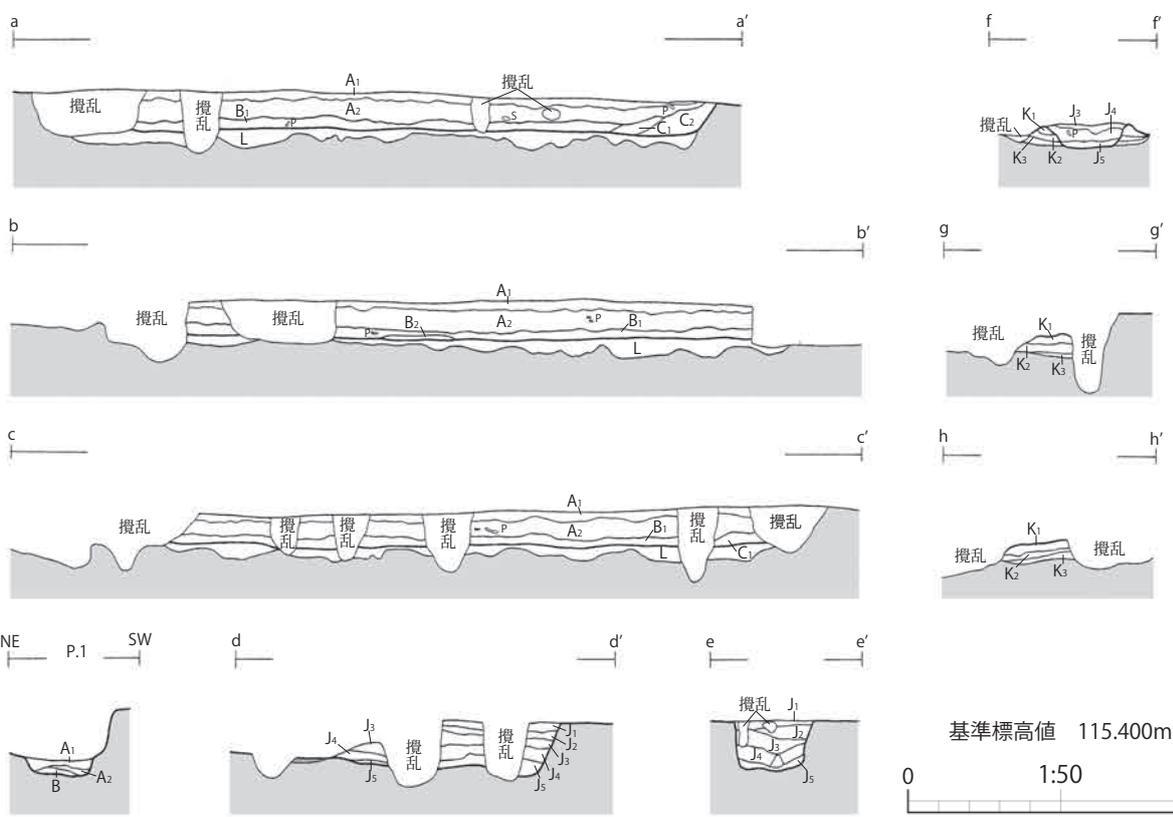
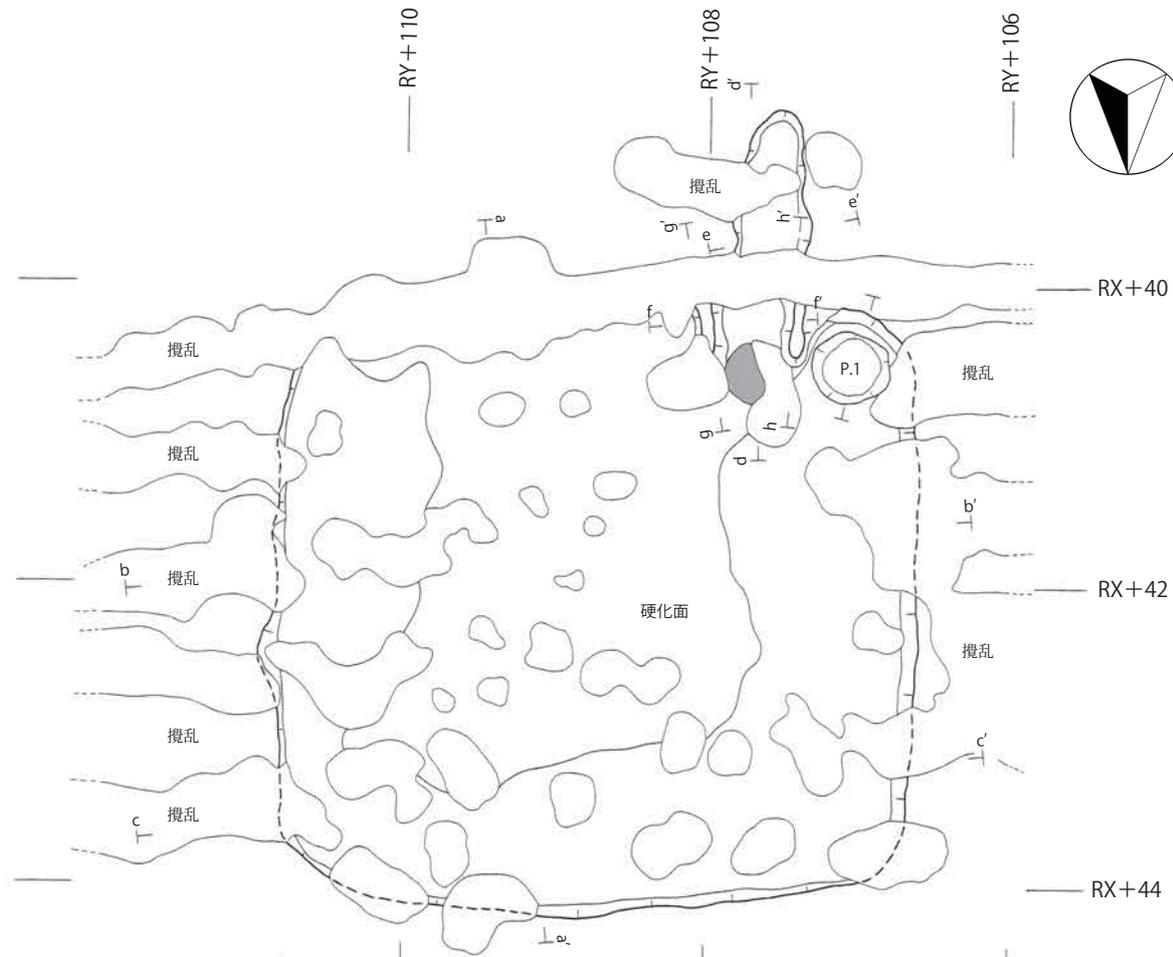
Ⅲ 遺構と遺物

R A 044 竪穴建物跡（第 5 図）

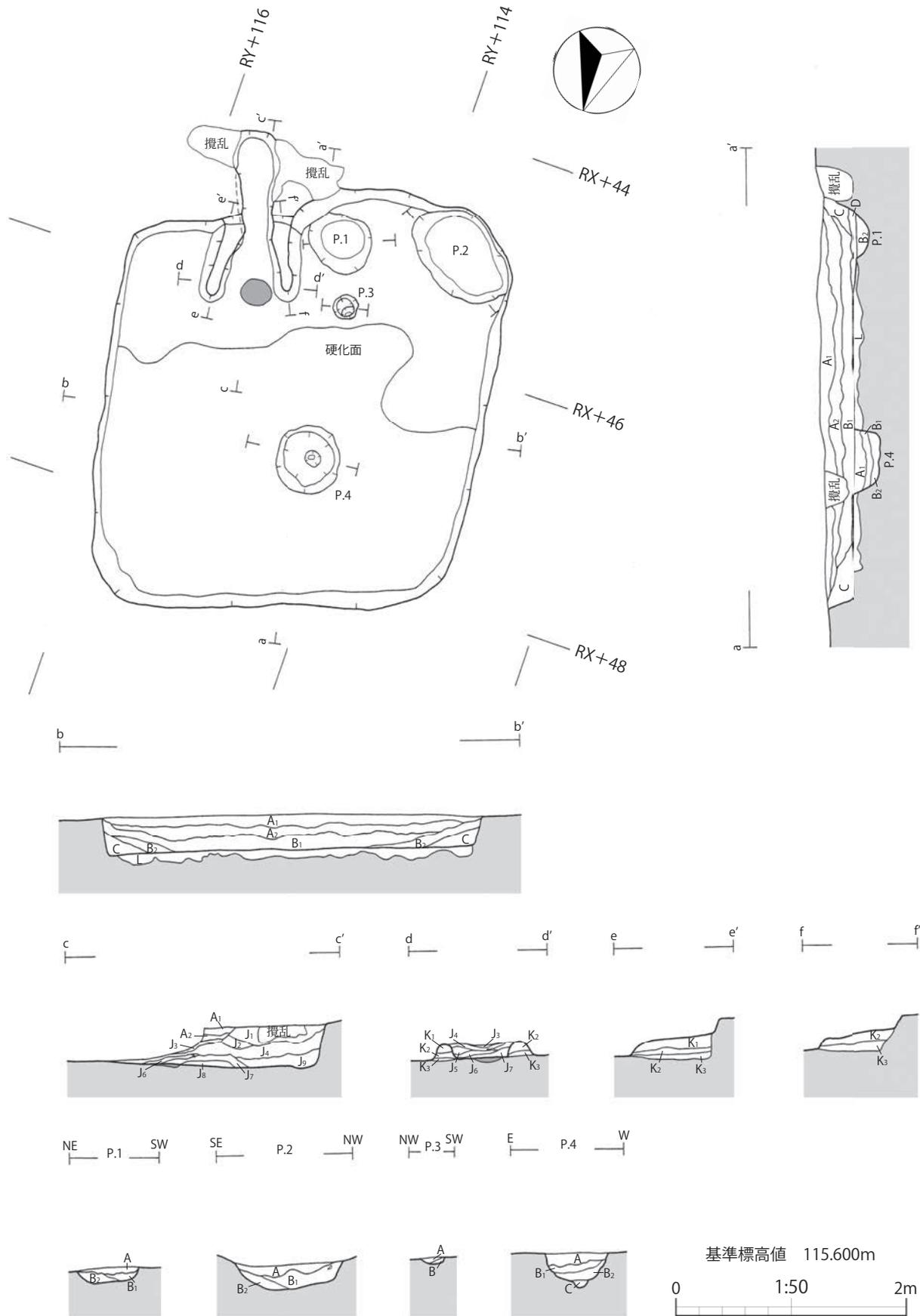
- 位置 調査区西部（C25d3 区） 平面形 不整隅丸方形 重複関係 なし
- 規模 南北 3.86m, 東西 4.34m カマド方向 S-3° -W
- 埋土 A～C 層に大別され、それぞれ 2 層に細分される。
- A 層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。A₂ 層の方がシルト粒の含有率が高い。
- B 層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。
- C 層は、黒褐色土を主体とする層で、上 2 層に比して若干明るい色調である。黄褐色シルト粒を少量含む。
- 壁の状態 攪乱により大半は湮滅しているが、遺存部分においては、外傾して直線的に立ち上がる。検出面からの深さは、約 0.58m を測る。
- 床の状態 耕作による攪乱が極めて著しい。床面はほぼ平坦で、中央から南東隅にかけて、硬く締まった硬化面が広がっている。構築土（L 層）は、黄褐色シルトと黒褐色土の混合土である。
- カマド 南壁の西寄りで検出された。焚口及び煙道の一部が攪乱により湮滅している。火床面は、熱浸透層厚約 0.04m を測る。被熱の度合いは小さく、焼け締まった様子は看取されなかった。煙道は、煙出しに向かって僅かに勾配を呈し、残存部分で、長さ約 1.28m, 幅約 0.52m を測る。カマド崩壊土（J 層）は暗褐色土を主体とする層で、上層には黒褐色土粒を、下層には黄褐色シルト粒を含んでいる。J₃～J₅ 層には、焼土粒や炭化物も含まれていた。
- 貯蔵穴 建物跡南西隅、カマドの西側で検出した。平面は不整円形を呈し、径約 0.53m, 最大深約 0.10m を測る。基底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。
- 出土遺物（第 8 図） 土師器 坏・甕・球胴甕, 須恵器 甕片が出土した。1 は、土師器 坏である。体部下半に段を有する。内面は、黒色処理が施されているが、やや摩滅している。2・4 は、土師器 球胴甕である。頸部に段を有し、2 は口縁部が外反して立ち上がる。調整は、器外面は、2 がヘラナデ、4 がヘラミガキで、内面はともにヘラナデである。3 は、土師器の甕である。

R A 045 竪穴建物跡（第 6 図・第 7 図）

- 位置 調査区西部（C25g1 区） 平面形 不整隅丸方形 重複関係 なし
- 規模 北西—南東 3.72m, 南西—北東 3.42m カマド方向 S-19° -E
- 埋土 A～D 層に大別され、A・B 層は 2 層に細分される。
- A 層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を微量含んでいる。A₁ 層の方が硬く締まっている。
- B 層は、暗褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。B₁ 層の方が黄褐色シルト粒の含有率が高く、色調も若干明るい。
- C 層は、褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含む。



第 5 図 R A 044 豎穴建物跡



第6図 RA 045 竪穴建物跡

D層は、暗褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。焼土粒も微量混じっている。

壁の状態 外傾して直線的に立ち上がる。検出面からの深さは、約0.34mを測る。

床の状態 南西部が張り出た不整形を呈している。床面はほぼ平坦で、北半部に硬く締まった硬化面が広がっている。構築土(L層)は、黄褐色シルトと黒褐色土の混合土である。

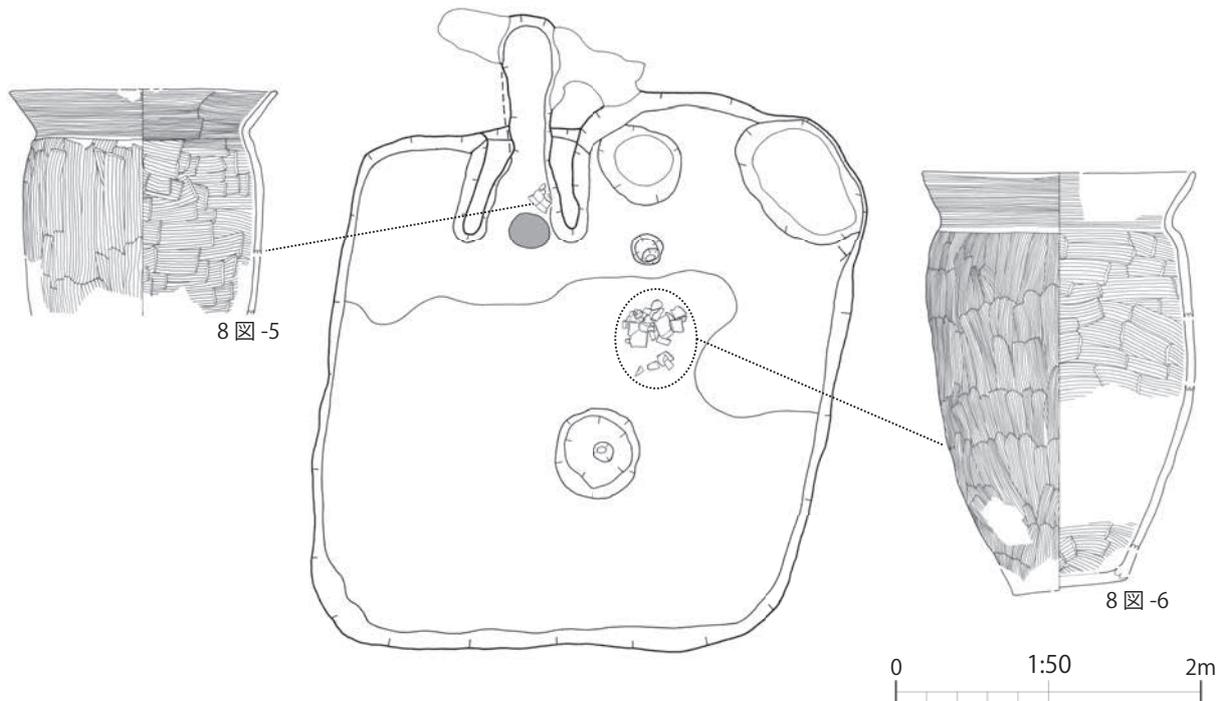
カマド 南壁の東寄りで検出された。火床面は、径約0.24mの不整円形を呈し、熱浸透層は、厚さ約0.03mを測る。明るい赤褐色を呈し、焼き締まっていた。煙道は、煙出しに向かって僅かに傾斜しており、長さ約0.75m、最大幅約0.39mを測る。

カマド崩壊土(J層)は、暗褐色土～褐色土を主体とする層で、上層のJ₁層を除き、焼土粒や焼土ブロックが混入していた。下層では炭化物も混入していた。カマド構築土(K層)は、黄褐色シルトを主体とし、暗褐色土粒が混入した層で形成されていた。

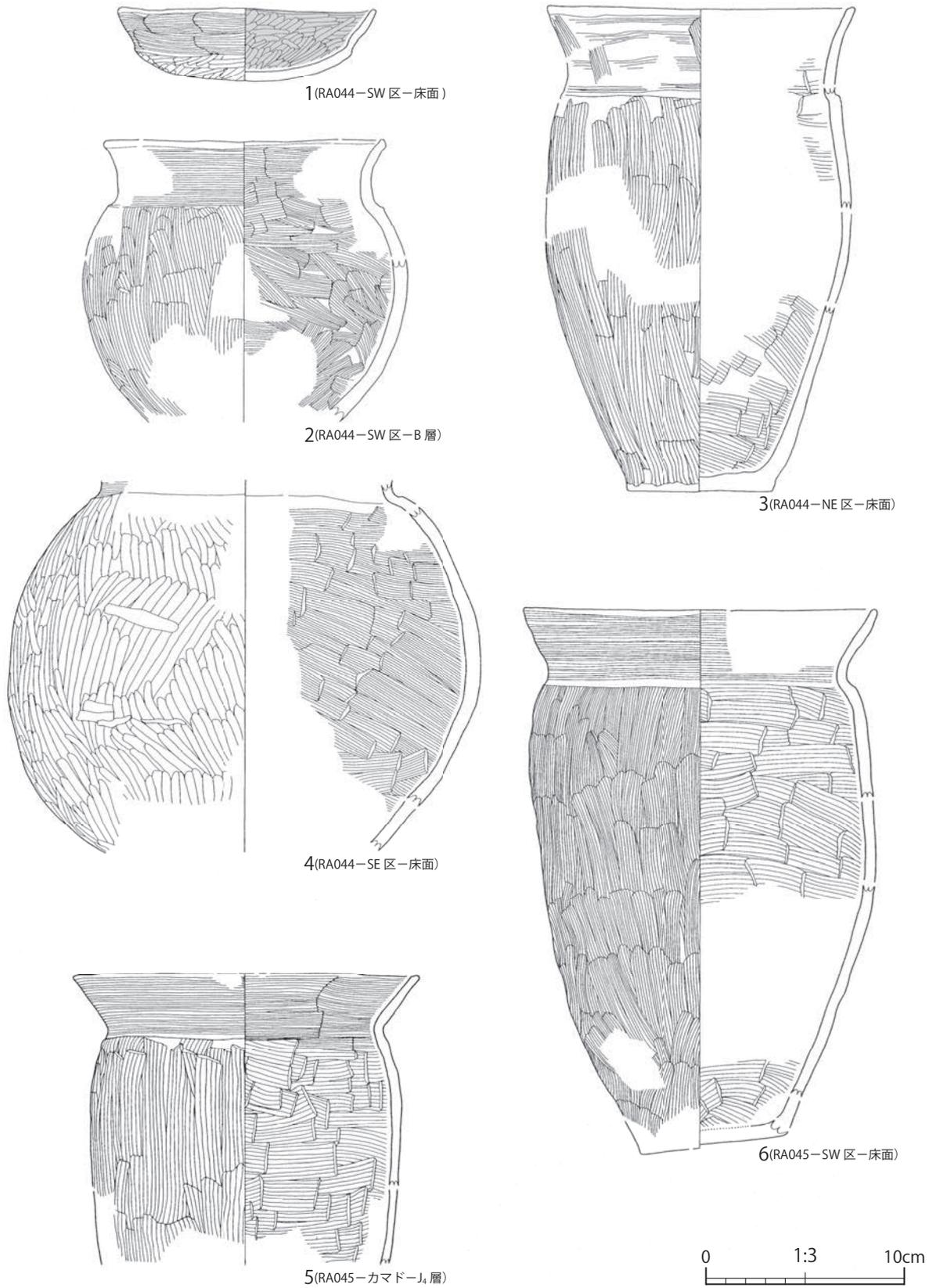
貯蔵穴 カマド西脇(P.1)と建物跡南西隅(P.2)で検出した。P.1は、不整円形を呈し、径約0.52m、最大深約0.12mを測る。P.2は、不整楕円形を呈し、長軸約0.97m、短軸約0.62m、最大深約0.20mを測る。基底面は凸レンズ状に彎曲し、壁は外傾して立ち上がる。

ピット カマド西袖脇(P.3)と床面中央よりやや北寄り(P.4)から検出された。P.4は、不整円形を呈し、径約0.58m、最大深約0.30mを測る。基底面はほぼ平坦で、中央部が円形にさらに一段落ち込んでいた。性格は明確にしないが、軸穴である可能性もあり、ロクロピット、ないしはそれに類するものであったとも推測できる。

出土遺物(第8図) 土師器 坏・甕が出土した。坏は小破片であるため、甕を図示した。共に外面はヘラナデ、内面はヘラナデが施されており、6の底面には、木葉痕らしき痕跡も認められる。



第7図 RA 045 竪穴建物跡 土器出土状況



第8図 RA 044・045 竪穴建物跡 出土土器

R A 046 竪穴建物跡 (第9図・第10図)

位置 調査区西部 (C2512区) 平面形 不整隅丸方形 重複関係 なし
規模 南北 3.40m, 東西 3.40m カマド方向 S-6°-W
埋土 A～D層に大別される。

A層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を微量と暗褐色土粒を少量含んでいる。A₁～A₃層に細別されるが、上層ほど黄褐色シルト粒の包含率が低く、暗褐色土粒の包含率が高い。色調も下層の方が若干明るい。

B層は、暗褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒と黒褐色土粒を少量含んでいる。一部、焼土粒と炭化物が少量混じっている。

C層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。

D層は、暗褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含む。

壁の状態 僅かに内彎しながら外傾して立ち上がる。検出面からの深さは、約0.25mを測る。

床の状態 ほぼ平坦である。床面の硬さはほぼ一様で、明確な硬化面は認められなかった。建物跡のほぼ中央部に、挿鉢状の土坑が掘り込まれていた。長軸約0.96m, 短軸約0.72m, 最大深約0.24mを測る。土層の堆積状況から見れば、床下施設とは言い難く、住居廃絶時、または埋没中に掘られたものと推測される。

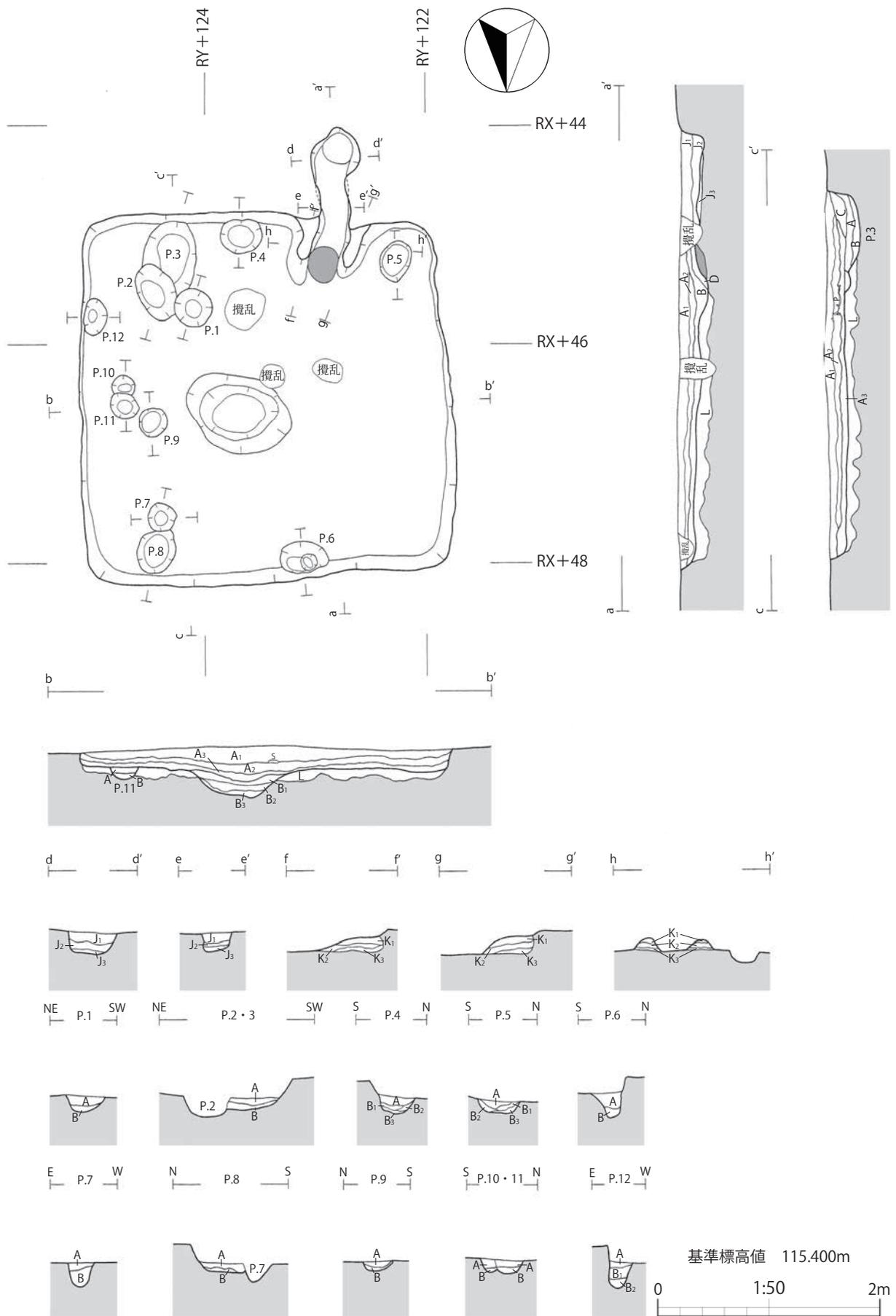
カマド 南壁の西寄りで検出された。火床面は、径約0.33mの不整円形で、熱浸透層の厚さは、約0.07mを測る。被熱で焼け締まった面は確認されなかった。煙道はほぼ平坦で、平面は緩やかなS字カーブを描いている。長さ約0.85m, 最大幅約0.44mを測る。

カマド崩壊土 (J層) は、暗褐色土を主体とする層で、黒褐色土粒と黄褐色シルト粒を少量含んでいる。カマド構築土 (K層) は、黄褐色シルトを主体とし、黒褐色土が含まれている。

貯蔵穴 建物跡南西部で検出した (P.3)。平面は不整楕円形を呈し、基底面は凸レンズ状に彎曲している。長軸約0.68m, 短軸約0.48m, 最大深約0.12mを測る。埋土は2層より成る。上層は暗褐色土を主体とし、焼土粒と炭化物を少量含んでいる。下層は黄褐色土を主体とし、暗褐色土粒を含んでいる。

ピット 11口検出した。平面は、不整円形、または不整楕円形を呈し、規模は、P.1 - 径約0.34m, 深さ約0.14m, P.2 - 径約0.34～0.52m, 深さ約0.18m, P.4 - 径約0.31～0.37m, 深さ約0.15m, P.5 - 径約0.27～0.38m, 深さ約0.10m, P.6 - 径約0.29～0.44m, 深さ約0.22m, P.7 - 径約0.25m, 深さ約0.21m, P.8 - 径約0.33～0.39m, 深さ約0.08m, P.9 - 径約0.27m, 深さ約0.08m, P.10 - 径約0.22m, 深さ約0.12m, P.11 - 径約0.26m, 深さ約0.12m, P.12 - 径約0.19～0.33m, 深さ約0.24mである。

出土遺物 (第12図) 土師器 坏・甕・小型甕・球胴甕が出土した。1は、土師器 坏である。体部下半に段を有し、内面は黒色処理が施されている。調整は、外面がヘラナデで、内面はヘラミガキが施されている。2は、小型甕である。内外面ともにヘラミガキが施され、底面はヘラケズリが施されている。3は球胴甕で、器外面がヘラミガキ、内面がヘラナデが施されている。4は長胴甕である。頸部に段を有し、調整はヘラナデが施されている。外面には部分的に摩滅が認められる。



第9図 RA 046 豎穴建物跡



第 10 図 RA 046 竪穴建物跡 土器出土状況

RA 047 竪穴建物跡 (第 11 図)

位置 調査区東部 (C24t24 区) 平面形 不整隅丸方形 重複関係 なし
 規模 南北 4.10m, 東西 4.14m カマド方向 S-5°-E
 埋土 A～D 層に大別され, B～D 層はそれぞれ 2 層に細分される。

A 層は, 黒褐色土を主体とする層で, 黄褐色シルト粒を少量含んでいる。

B 層は, 黒褐色土を主体とする層で, 黄褐色シルト粒を少量含んでいる。B₂ 層の方が黄褐色シルト粒の含有率が高い。

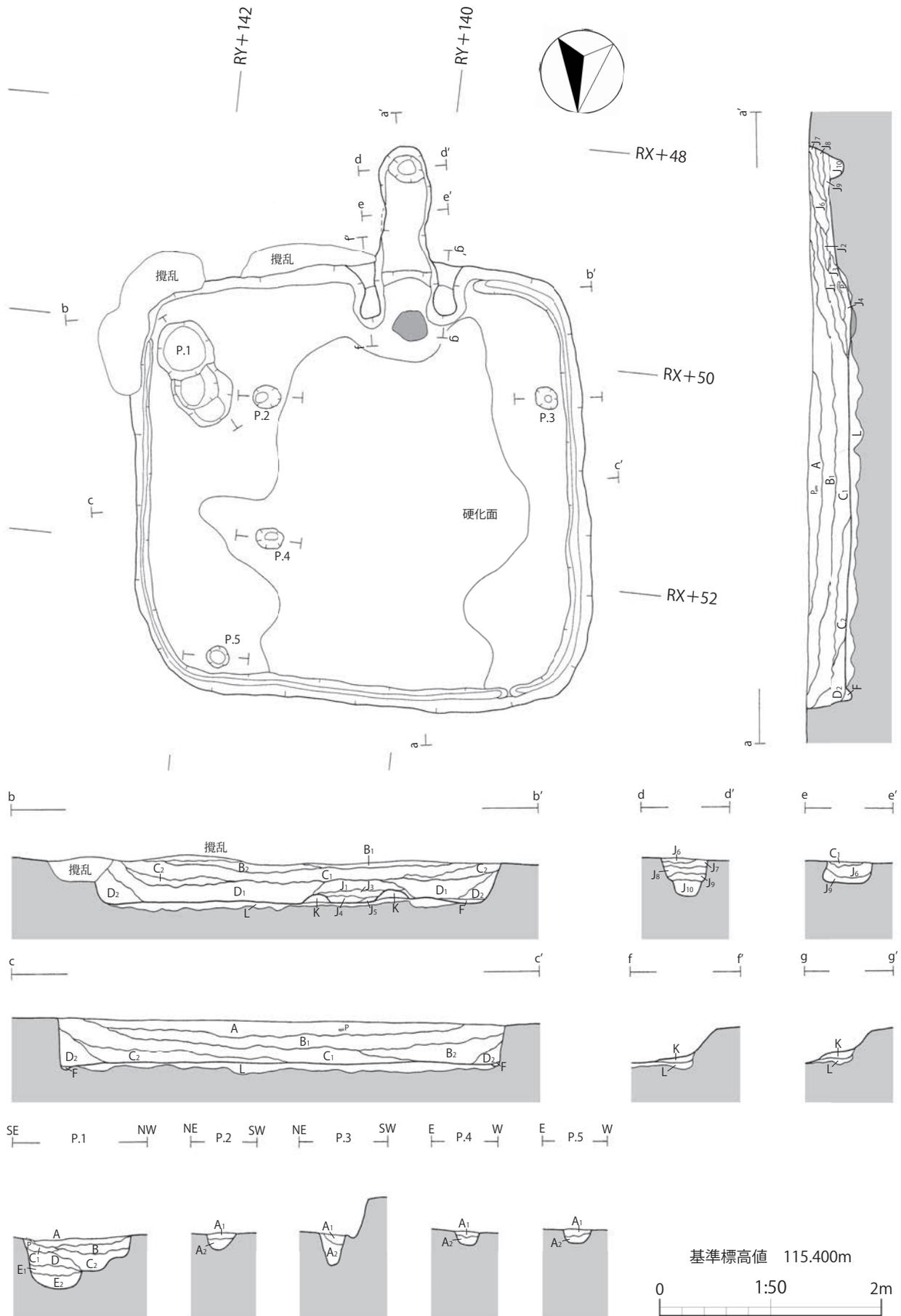
C 層は, 暗褐色土を主体とする層で, 黄褐色シルト粒を少量, 黒褐色土粒を微量含んでいる。C₂ 層の方が黄褐色シルト粒の含有率が低く, 色調は若干暗い。上 2 層に比して軟質で, 密度も若干疎らである。

D 層は, 暗褐色土を主体とする層で, 黄褐色シルト粒を少量, 黒褐色土粒を微量含んでいる。D₂ 層の方が黄褐色シルト粒の含有率が高く, 色調も若干明るい。

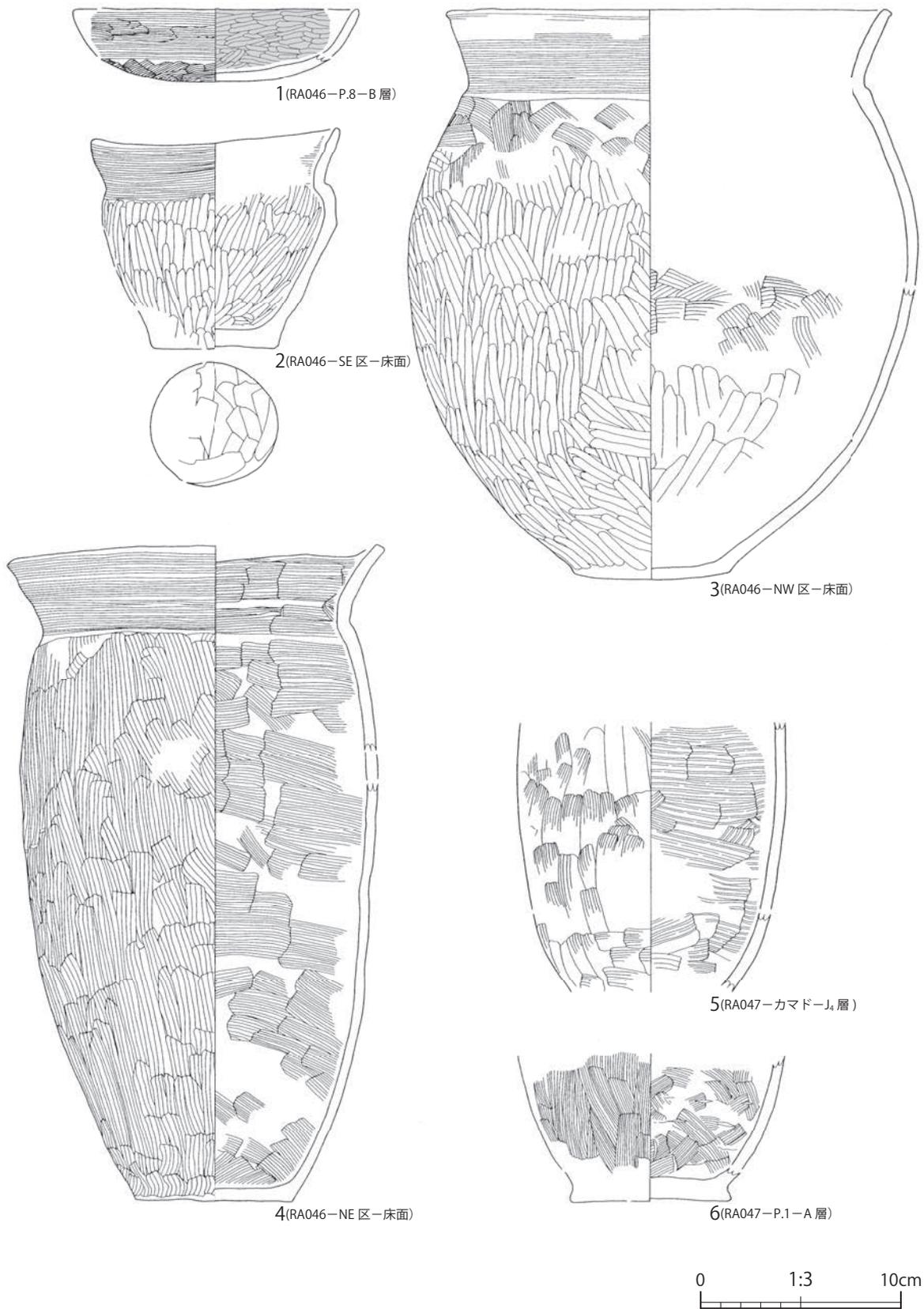
壁の状態 外傾して直線的に立ち上がる。検出面からの深さは, 約 0.40m を測る。

床の状態 床面はほぼ平坦で, カマド燃焼部の手前から北端部にかけて, 硬く締まった硬化面が広がっている。南東壁を除き, 幅約 0.06～0.12m, 深さ約 0.03～0.06m の周溝が巡っている。

カマド 南壁のやや西寄りで検出された。火床面は, 径約 0.28m の不整円形を呈し, 熱浸透層厚約 0.05m を測る。部分的に強い被熱で焼け締まっていた。煙道は, 燃焼部奥で基底面が一段上がり, そこから煙出しに向かって緩やかな登り勾配を呈し, 煙出し基底面が一段落ちている。規模は, 長さ約 1.08m, 最大幅約 0.42m を測る。



第 11 図 R A 047 竪穴建物跡



第 12 図 R A 046・047 竪穴建物跡 出土土器

カマド崩壊土 (J 層) は、上層は褐色土、下層は暗褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいた。火床面上層の J₄ 層には、焼土粒と炭化物も含まれていた。カマド構築土 (K 層) は、黄褐色シルトを主体とし、暗褐色土粒が混入した土で形成されていた。

貯蔵穴 建物跡南東部で検出した。平面は不整楕円形を呈し、基底面は階段状に 3 段形成されている。長軸約 1.00m、短軸約 0.50m、最大深約 0.45m を測る。埋土は A ~ E 層の 5 層から成る。A 層は黒褐色土を主体とし、黄褐色シルト粒が少量含まれていた。B ~ E 層は、暗褐色 ~ 褐色土を主体とし、黄褐色シルト粒を少量、焼土粒と炭化物を微量含む層である。

ピット 4 口検出した。P.2 ~ P.4 が支柱穴と想定される。いずれも不整円形を呈し、規模は、P.2 - 径約 0.22m、深さ約 0.16m、P.3 - 径約 0.19m、深さ約 0.29m、P.4 - 径約 0.17 ~ 0.24m、深さ約 0.14m、P.5 - 径約 0.22m、深さ約 0.13m を測る。

出土遺物 (第 12 図) 土師器 甕が出土した。5 は体部のみで、器面調整は、外面がヘラナデ、内面はハケメが施されている。内外面ともに若干摩滅している。6 は甕の底部で、内外面ともにヘラナデが施されている。

R A 048 竪穴建物跡 (第 13 図・第 14 図・第 15 図)

位置 調査区東部 (D24a23 区) 平面形 不整隅丸方形 重複関係 R A 050 (新)
規模 北西 - 南東 4.56m、南西 - 北東 5.15m カマド方向 N-13° -W
埋土 A ~ D 層に大別される。

A 層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。

B 層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。さらに 2 層に細分され、下層の B₂ 層の方が黄褐色シルト粒の含有率が高く、色調も若干明るい。

C 層は、暗褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含む。

D 層は、褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含む。

壁の状態 外傾して直線的に立ち上がる。検出面からの深さは、約 0.35m を測る。

床の状態 北東部が攪乱により毀損しているが、床面はほぼ平坦で、壁際を除くほぼ全面に、硬く締まった硬化面が広がっている。構築土 (L 層) は、黄褐色シルトと黒褐色土の混合土である。

カマド 北西壁のほぼ中央で検出された。攪乱により袖と火床面の一部が湮滅している。火床面は遺存部分で、径約 0.56m、熱浸透層厚約 0.04m を測る。被熱の度合いは若干強めで、中央部は硬く焼き締まっていた。煙道基底面は、燃燒部の奥で強く登り勾配を呈し、煙道中央部が一段低くなり、さらに煙出しが一段低くなる形態を呈していた。煙道部の長さ約 1.34m、最大幅約 0.52m を測る。カマド崩壊土 (J 層) は、上層が暗褐色土、下層が褐色土を主体とし、量の多少はあるが、いずれの層においても黄褐色シルト粒が含まれていた。火床面直上の J₂ 層には焼土粒と炭化物が多量に含まれ、J₅ ~ J₇ 層には少量含まれていた。煙道及び煙出しの J₈ ~ J₁₀ 層は、黄褐色シルト粒を少量含む暗褐色土が主体の層で、一部において焼土粒が微量含まれていた。

ピット 4 口検出した。このうち P.1・P.2・P.4 が支柱穴と想定される。いずれも不整円形を呈し、規模は、P.1 - 径約 0.26m、深さ約 0.21m、P.2 - 径約 0.19m、深さ約 0.09m、P.3 - 径約 0.36m、深さ約 0.18m、P.4 - 径約 0.24m、深さ約 0.13m を測る。

出土遺物 (第 20 図) 土師器 坏・甕が出土した。1・2 は、土師器 坏である。体部下半に段を有し、内面は、黒色処理が施されている。器形は、1 は体部上半～口縁部が直線的に外傾して立ち上がっているが、2 はやや内彎して立ち上がっている。器面調整は、外面は 1 がヘラナデとヘラミガキ、2 がヘラミガキ、内面はともにヘラミガキである。

3～7 は、土師器 甕である。いずれも、底部から内彎しながら立ち上がり、頸部に段を有し、口縁部が大きく外反する器形を呈する。器面調整は、6 を除き、内外面にヘラナデが施されている。

R A 049 竪穴建物跡 (第 13 図・第 14 図・第 16 図)

位置 調査区東部 (D25a1 区) 平面形 不整隅丸方形 重複関係 R A 050 (新)
規模 北西－南東 3.78m, 南西－北東 4.00m カマド方向 S-16° -E
埋土 A～C 層に大別され、B 層は 2 層に細分される。

A 層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を微量含んでいる。

B 層は、暗褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。B₁ 層と B₂ 層とは、黄褐色シルト粒の含有率に大差はないが、B₂ 層の方が色調は若干明るい。

C 層は、褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。

壁の状態 ほぼ直線的に外傾して立ち上がる。検出面からの深さは、約 0.27m を測る。

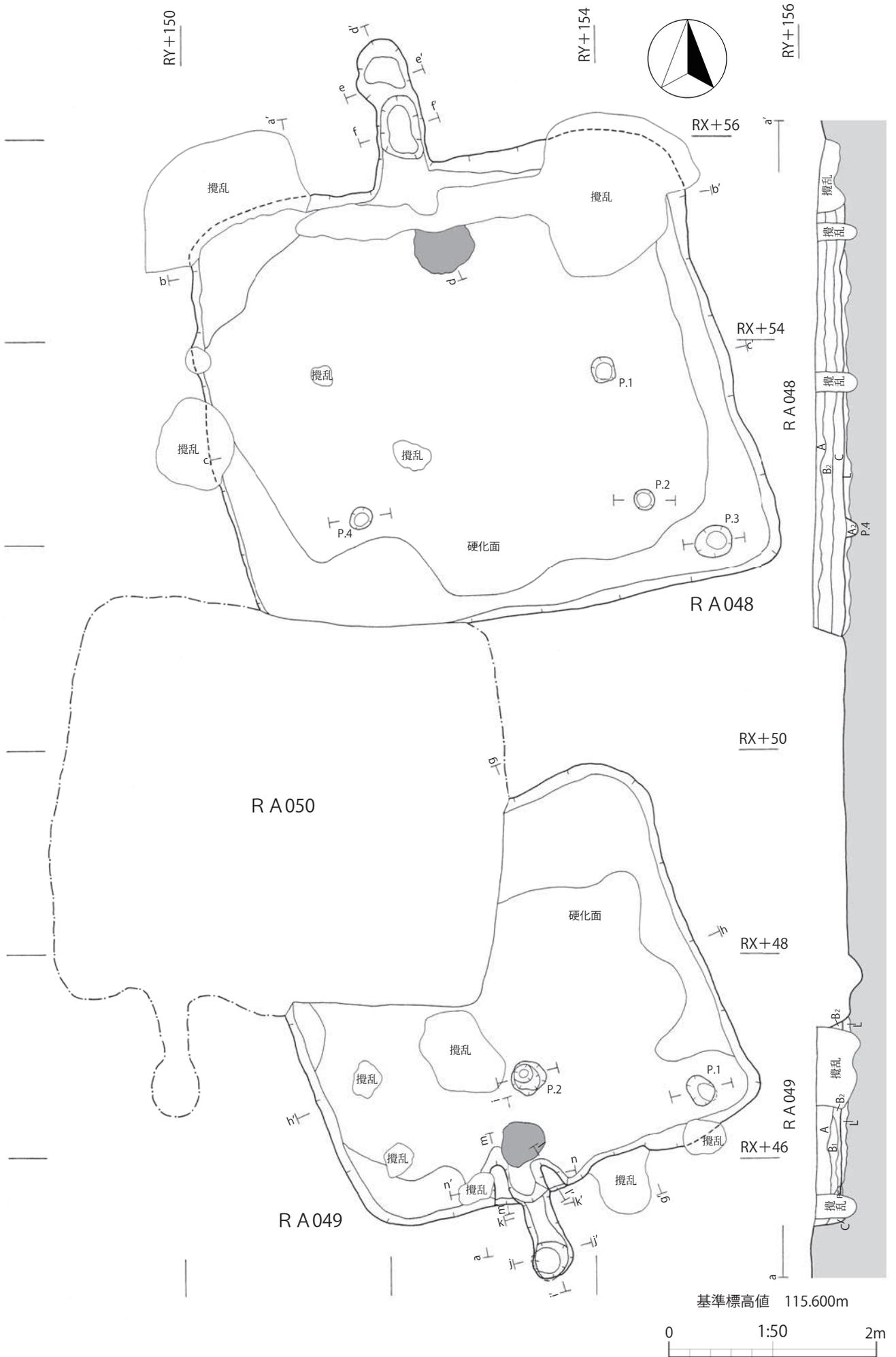
床の状態 ほぼ平坦である。北東部を除くほぼ全面において、硬く締まった硬化面が確認された。構築土 (L 層) は、黄褐色シルトと黒褐色土の混合土である。

カマド 南東壁のやや西寄りで見出された。火床面は、径約 0.46m の不整形で、熱浸透層の厚さは、約 0.07m を測る。中央部が強く熱を受け、硬く焼け締まっていた。煙道は、基底面が、燃焼部の奥で一段高くなり、煙出しに向かって僅かに登り勾配を呈し、煙出しが一段低くなる形態を呈する。煙道の規模は、長さ約 0.78m, 最大幅約 0.40m を測る。

カマド崩壊土 (J 層) は、暗褐色土または褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を含んでいる。J₁～J₄ 層には焼土粒と炭化物が微量含まれ、火床面直上の J₄ 層には、焼土ブロックも点在していた。カマド構築土 (K 層) は黄褐色シルトを主体とし、暗褐色土が含まれていた。

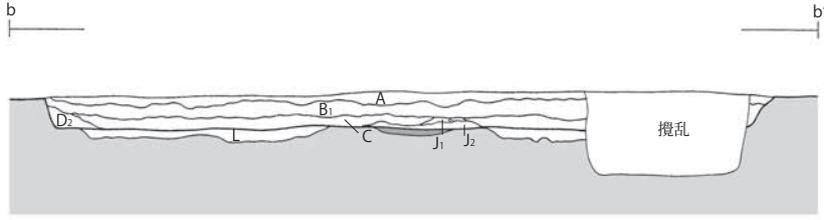
ピット 建物跡南東隅とカマド焚口前から 1 口ずつ確認された。ともに不整形を呈し、規模は、P.1 - 径約 0.30m, 深さ約 0.25m, P.2 - 径約 0.32m, 深さ約 0.22m を測る。埋土は 2 層から成り、上層は黒褐色土を主体とし、下層は黄褐色土を主体としている。

出土遺物 (第 21 図) 土師器 坏・甕・小型甕が出土した。1 は、土師器 坏である。体部下半に段を有し、内面は黒色処理が施されている。調整は、外面がヘラミガキとヘラナデで、内面はヘラミガキが施されている。2 は、小型甕である。内外面ともにヘラナデが施されている。3・4 は長胴甕で、器面調整は、外面はヘラナデで、内面は、3 がハケメ、4 がヘラナデである。

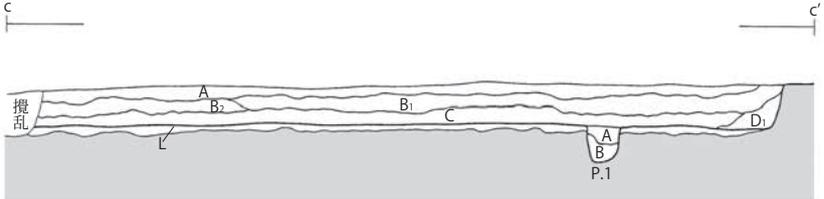
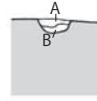


第 13 図 RA 048・049 竖穴建物跡 (1)

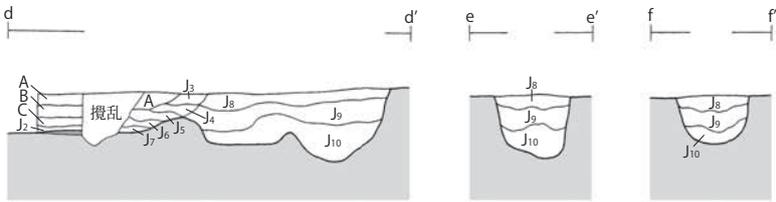
RA048



W P.2 E



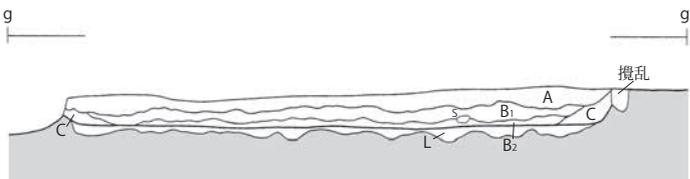
W P.3 E



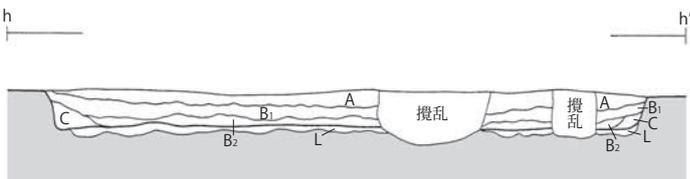
W P.4 E



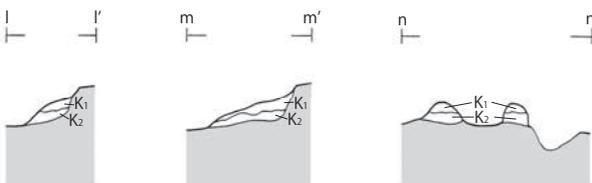
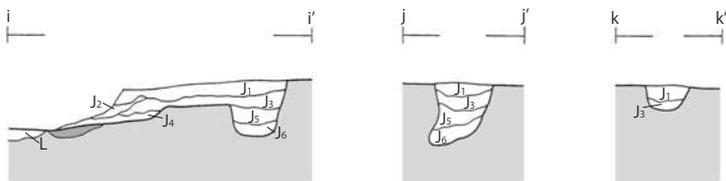
RA049



E P.1 W



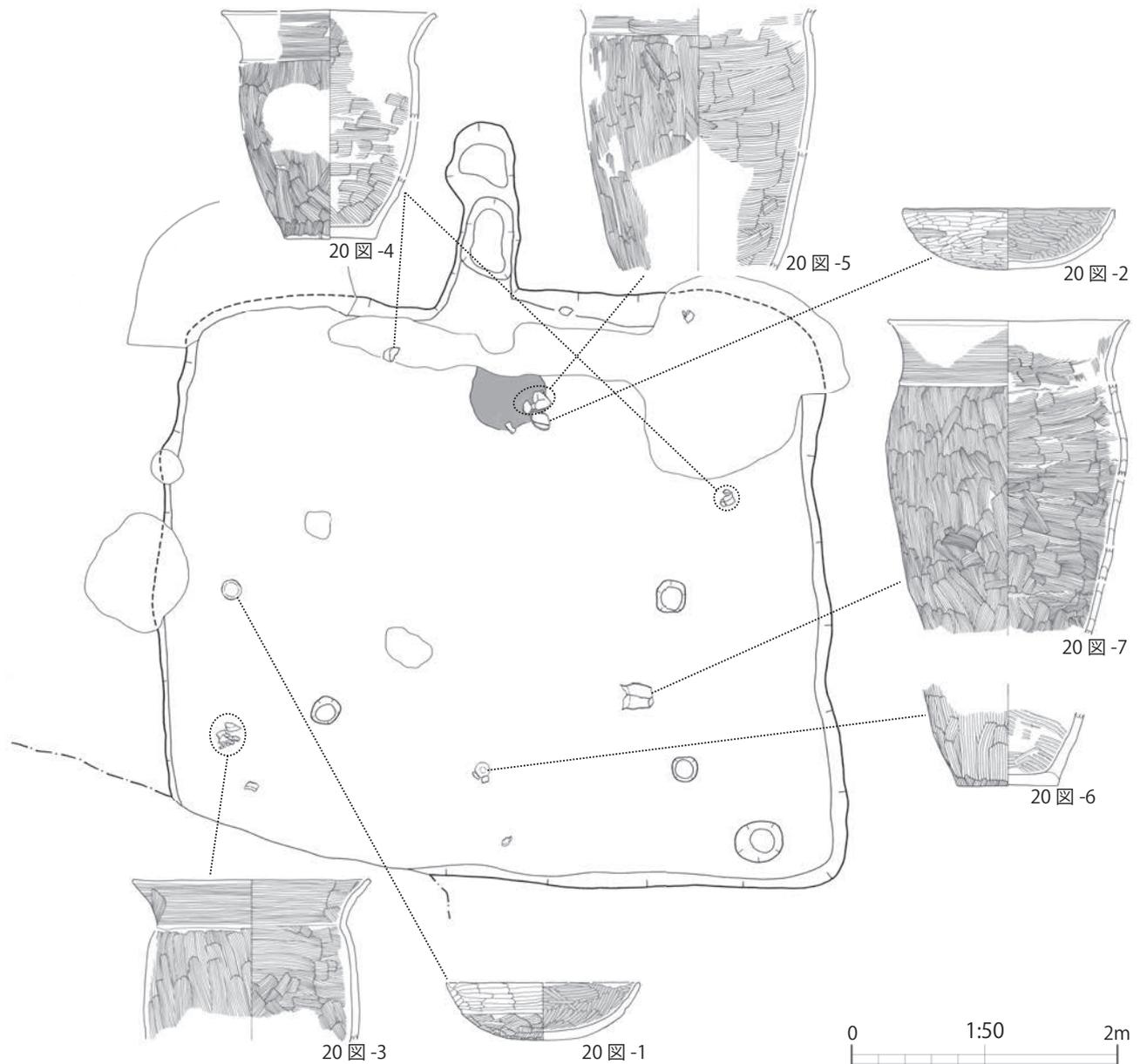
E P.2 W



基準標高値 115.600m



第14図 RA 048・049 豎穴建物跡 (2)



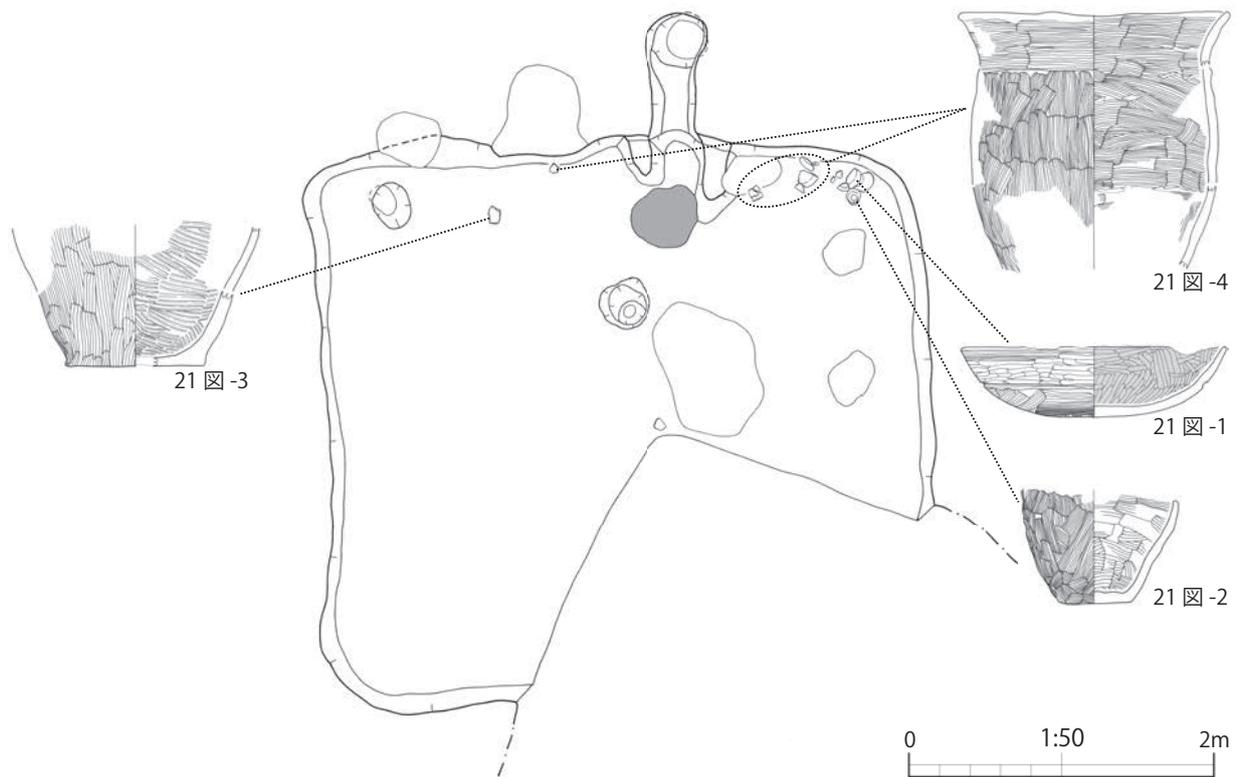
第 15 図 RA 048 竪穴建物跡 土器出土状況

RA 050 竪穴建物跡 (第 17 図・第 18 図)

位置 調査区東部(C24y25区) 平面形 不整隅丸方形 重複関係 RA 048・049(旧)
 規模 南北 3.98m, 東西 4.46m カマド方向 S-3°-E
 埋土 A～E層に大別され, それぞれ2～4層に細分される。

A層は, 黒褐色土を主体とする層で, 黄褐色シルト粒を少量含んでいる。2層に細分されるが, 黄褐色シルト粒の含有率は, 下層のA₂層の方が高い。A₁層には, 十和田a降下火山灰と思われる灰白色火山灰が点在して含まれていた。

B層は, 暗褐色土を主体とする層で, 黄褐色シルト粒を少量含んでいる。色調にほとんど差異は認められないが, B₁層が黄褐色シルト粒の含有率は高い。



第16図 RA 049 竪穴建物跡 土器出土状況

C層は、暗褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。

D層は、褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含む。焼土粒と炭化物も微量含まれている。

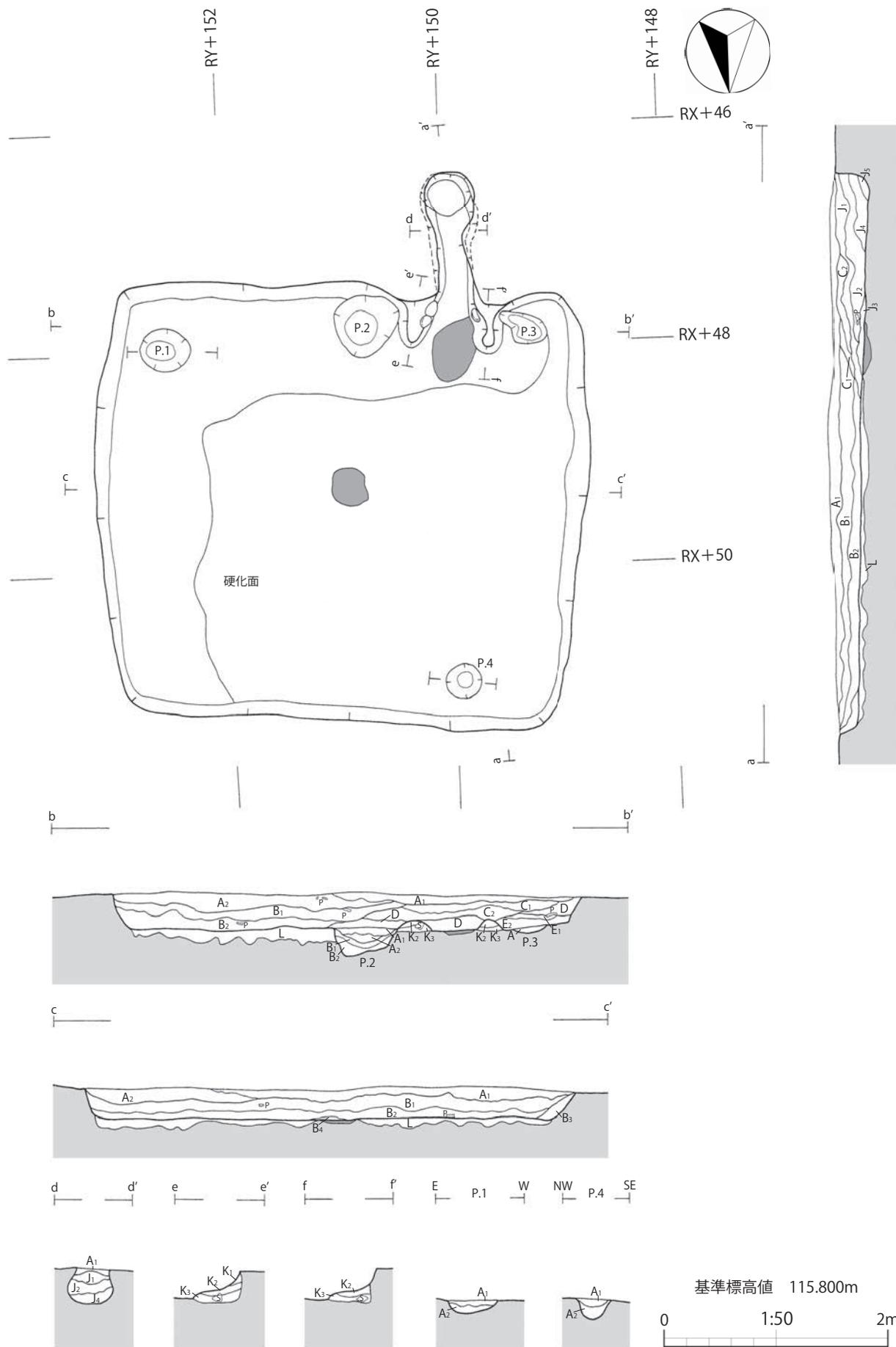
E層は、暗褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。焼土粒と炭化物も微量混じっている。

壁の状態 僅かに内彎しながら外傾して立ち上がる。検出面からの深さは、約0.35mを測る。

床の状態 ほぼ平坦である。西部から北部にかけて硬く締まった硬化面が認められた。ほぼ中央部からは火床面が検出された。被熱で硬く焼け締まっており、径約0.32m、熱浸透層厚約0.03mを測る。構築土(L層)は、黄褐色シルトと暗褐色土の混合土である。

カマド 南壁の西寄りで検出された。火床面は、不整楕円形を呈し、長軸約0.62m、短軸約0.39m、熱浸透層厚約0.07mを測る。中央部ほど強い熱を受け、硬く焼け締まっていた。煙道は、基底面はほぼ平坦であるが、煙出し部が若干低くなっている。壁は部分的にオーバーハンクしている。規模は、長さ約1.16m、最大幅約0.45mを測る。

カマド崩壊土(J層)は、燃焼部付近のJ₂・J₃層は、暗赤褐色土を主体とし、黄褐色シルト粒を微量、焼土粒と焼土ブロックを少量含んでいる。煙出し付近のJ₄・J₅層は、黒褐色土を主体とし、黄褐色シルトが含まれている。カマド構築土(K層)は、黄褐色シルトを主体とし、暗褐色土が少量含まれている。川原石が混入しており、袖の芯材として使用されたと推測される。

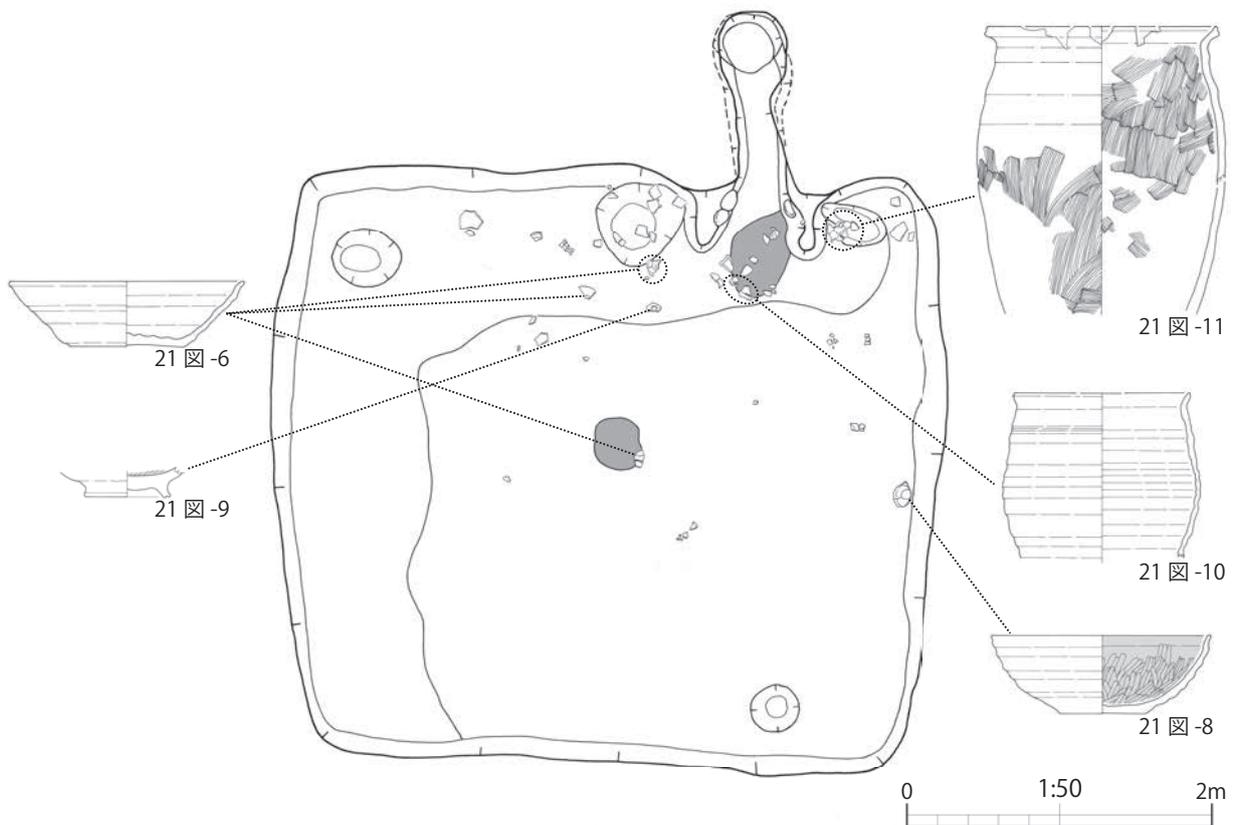


第 17 図 R A 050 竪穴建物跡

貯蔵穴 カマド東脇で検出した (P.2)。平面は不整形円形を呈し、基底面はU字状に彎曲している。径約 0.54 ~ 0.59m, 最大深約 0.26m を測る。埋土は 2 層より成る。上層は黒褐色土を主体とし、黄褐色シルト粒と焼土粒を微量含んでいる。下層は黄褐色土を主体とし、暗褐色土粒を含んでいる。

ピット 南東隅、カマド西脇、北西隅の 3ヶ所から 3口検出した。P.1・P.4 は、ともに不整形円形を呈し、規模は、P.1 - 径約 0.41m, 深さ約 0.11m, P.4 - 径約 0.31m, 深さ約 0.17m を測る。P.3 はカマド脇から検出されたが、規模が小さいため、貯蔵穴とは判断しなかった。長軸約 0.45m, 短軸約 0.25 m, 深さ約 0.06m を測る。

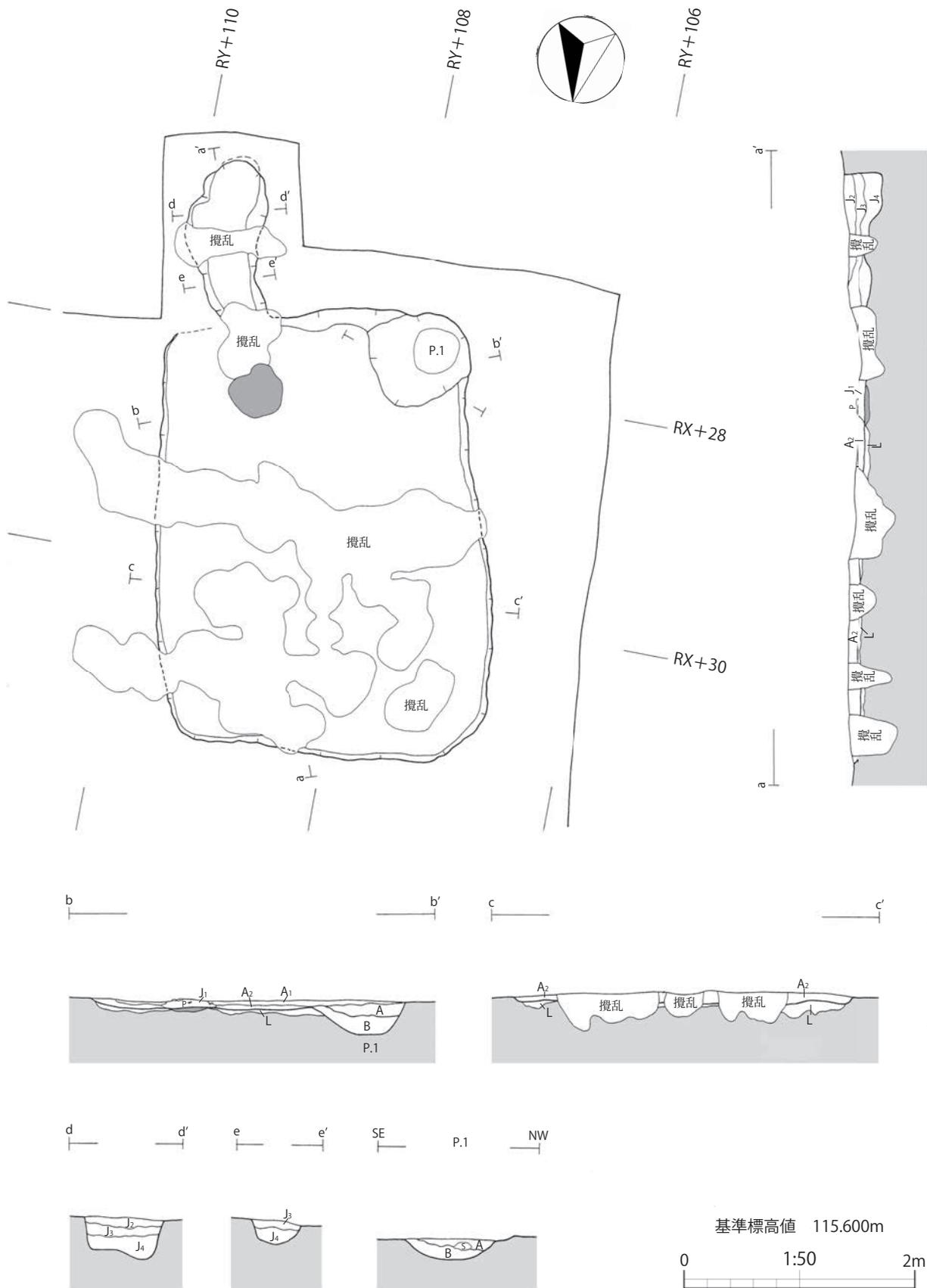
出土遺物 (第 21 図) 5 ~ 7 は、あかやき土器 坏である。器形は、5 は体部が内彎気味に立ち上がり、6・7 はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部に至っている。いずれも底部は、回転糸切無調整である。8 は、土師器 坏である。体部が内彎気味に立ち上がって口縁部に至る器形を呈する。器内面は黒色処理され、ヘラミガキが施されている。底部は、回転糸切後にヘラナゲで再調整されている。9 は、土師器 高台付坏の台部である。内面は黒色処理され、ヘラミガキが施されている。10・11 は、あかやき土器 甕である。体部が内彎しながら立ち上がり、口縁部が短く外反する器形を呈する。小破片のため図示しなかったが、他に須恵器 坏・甕、土師器 甕も出土している。



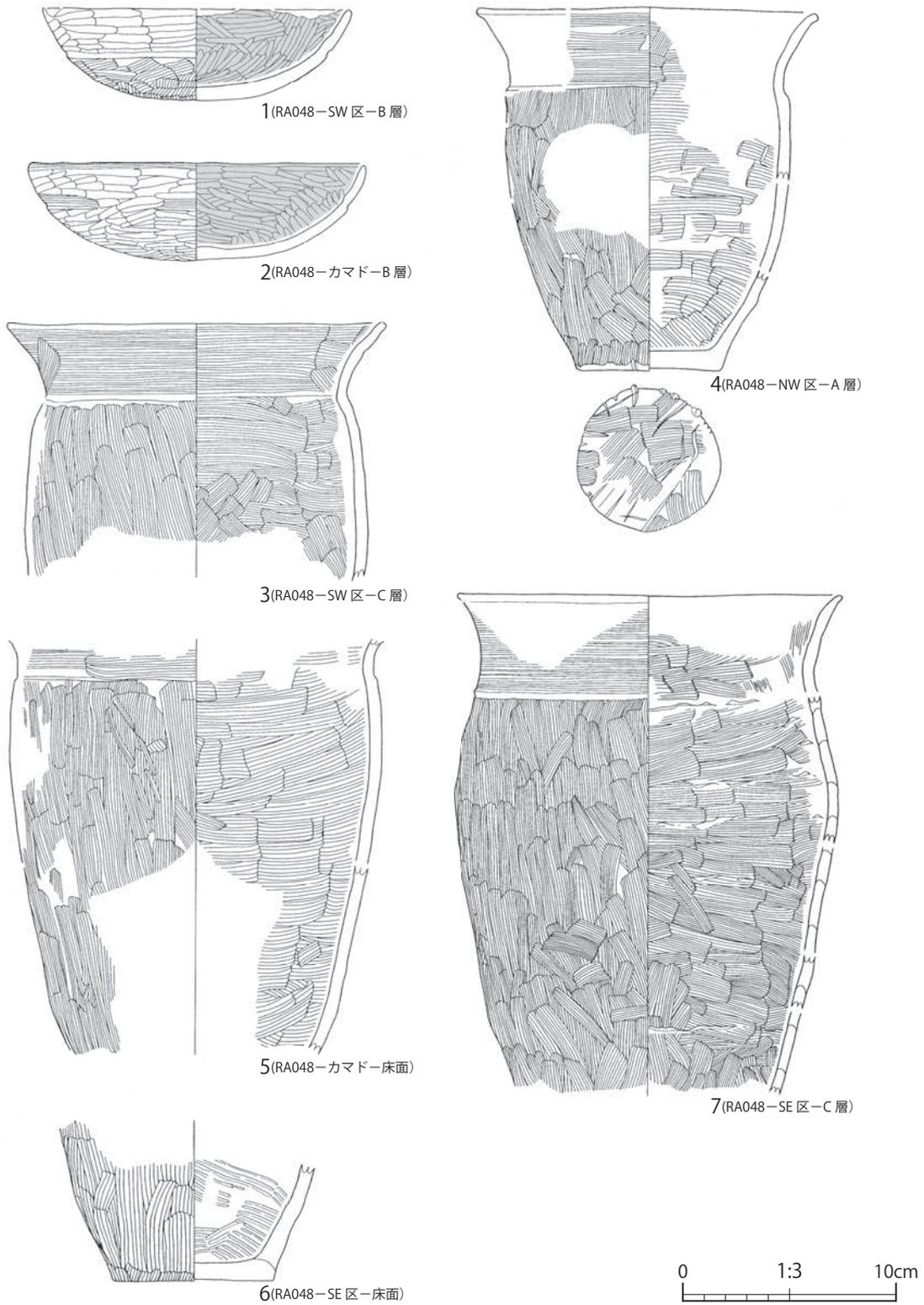
第 18 図 RA 050 竪穴建物跡 土器出土状況

R A 051 竪穴建物跡 (第 19 図)

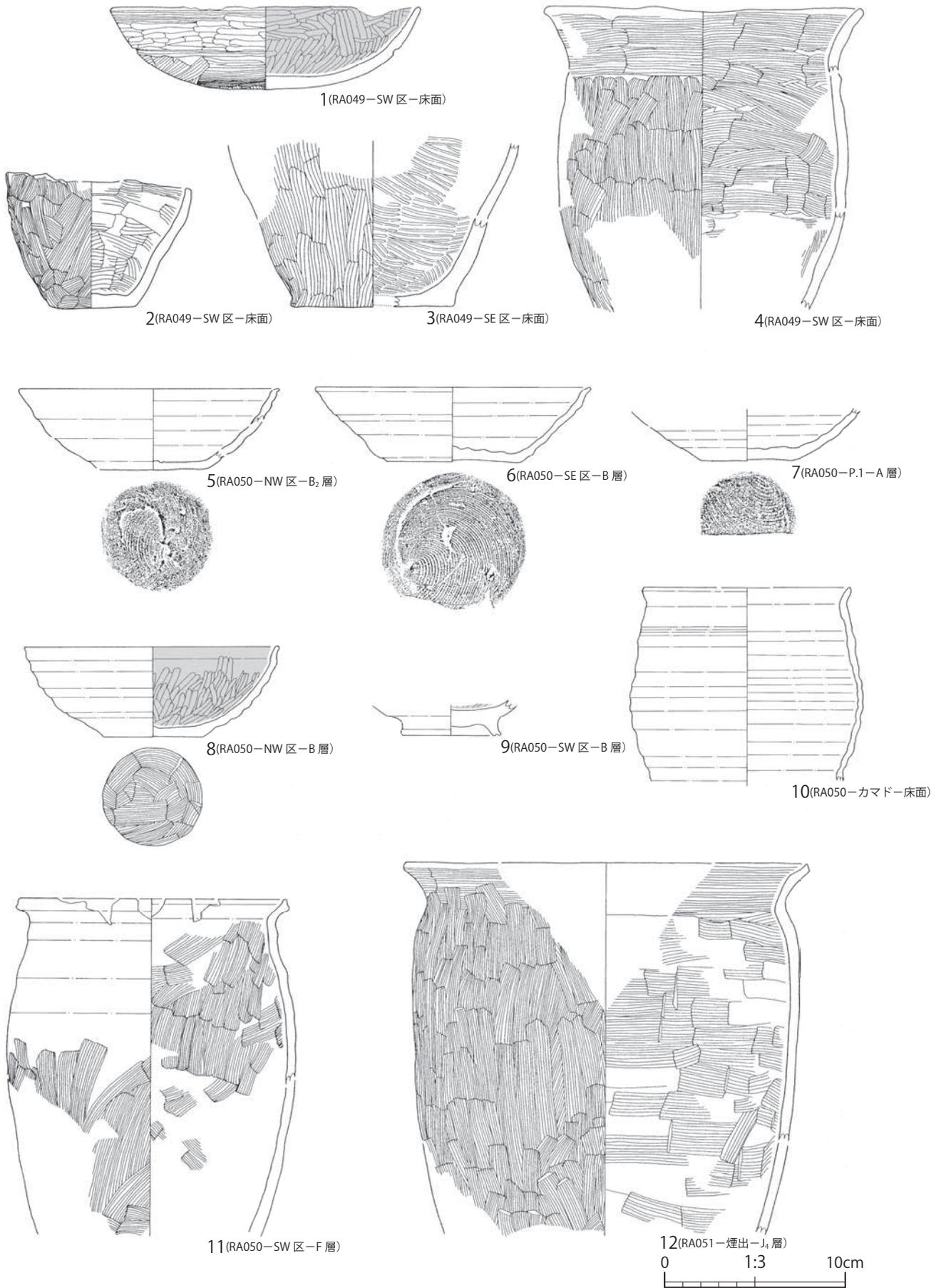
- 位置 調査区南西部 (C25d10 区) 平面形 不整隅丸長方形 重複関係 なし
- 規模 北西-南東 3.98m, 南西-北東 2.99m カマド方向 S-20°-E
- 埋土 A 層から成る。黒褐色土を主体とする層で, 黄褐色シルト粒を少量含んでいる。
- 壁の状態 後世の攪乱により大半を削平されており, 遺存状況は悪い。遺存部分で, 最大壁高約 0.07m を測る。
- 床の状態 攪乱により北半部が大きく毀損している。遺存部分の床面は, ほぼ平坦である。明確な硬化面は確認されなかった。
- カマド 南壁の東寄りで検出された。火床面は一部が攪乱で毀損しているが, 径約 0.46m の不整形で, 熱浸透層の厚さは, 約 0.05m を測る。中央部が強く熱を受け, 硬く焼け締まっていた。煙道は, 平面が「く」字状に屈曲する形態を呈する。基底面は, 煙出しに向かって緩やかに傾斜しており, 煙出しが最も深くなる。煙道の規模は, 長さ約 1.48m, 最大幅約 0.66m を測る。
- カマド崩壊土 (J 層) は, 暗赤褐色土を主体としており, J₁・J₄ 層は焼土粒を多量に, J₂・J₃ 層は少量含んでいる。
- 貯蔵穴 建物跡南西隅で確認された。不整楕円形を呈し, 基底面はほぼ平坦で, 北東壁が緩やかに立ち上がり, 南西壁は急な勾配を呈して立ち上がっている。規模は, 長軸約 0.88m, 短軸約 0.78m, 最大深約 0.18m を測る。埋土は 2 層から成り, 上層は黒褐色土を主体とし, 黄褐色シルト粒が含まれていた。下層は暗褐色土を主体とし, 黄褐色シルト粒を少量含んでいる。
- 出土遺物 (第 21 図) 土師器 甕が出土した。12 は, 体部が緩やかに立ち上がり, 口縁部が短く外反する器形を呈する。器面調整は, 内外面ともにヘラナデが施されている。図示しなかったが, 他にあかやき土器 坏, 土師器 坏, 須恵器 甕が出土している。



第 19 図 R A 051 豎穴建物跡



第 20 図 R A 048 竪穴建物跡 出土土器



第 21 図 R A 049 ~ 051 竪穴建物跡 出土土器

IV ま と め

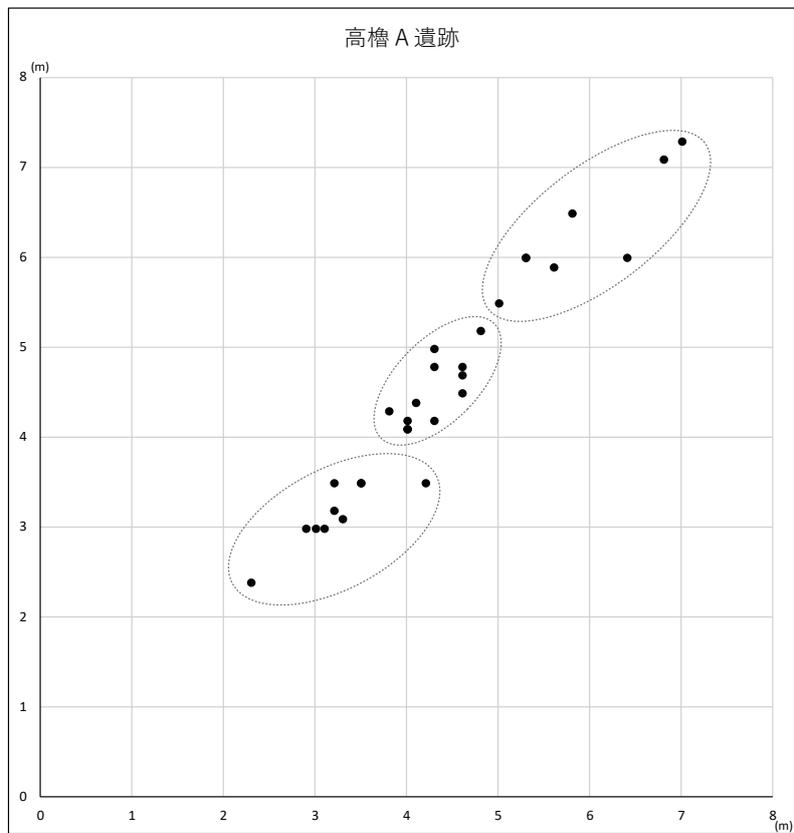
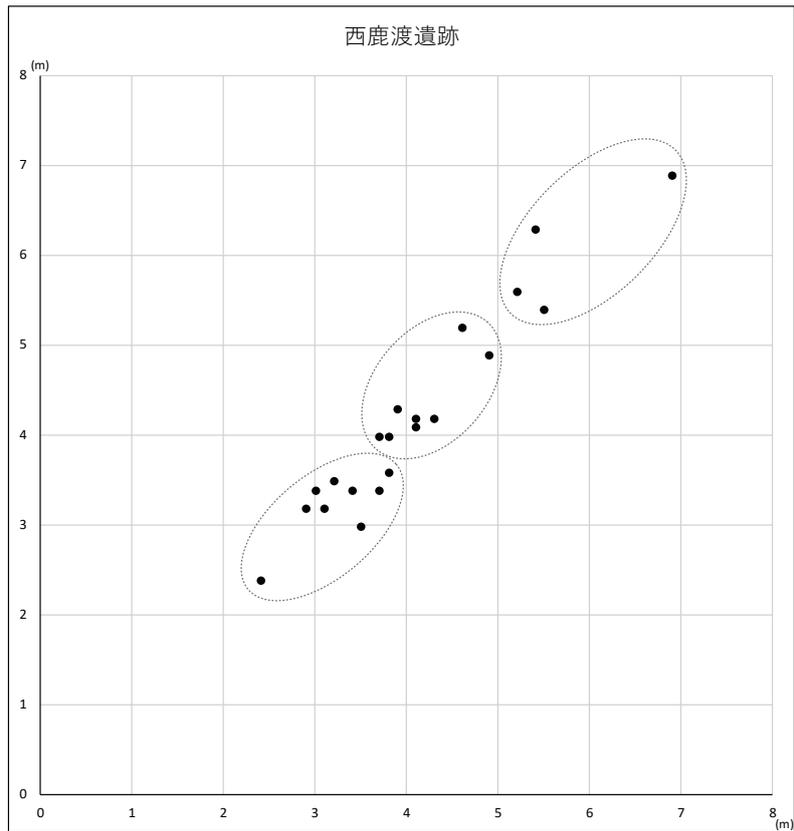
本調査の結果、竪穴建物跡 8 棟が確認された。このうち、R A 044～049 竪穴建物跡は、出土した土器の様相から、8 世紀中葉から後葉に帰属すると考えられる。本章では、これらの竪穴建物跡を中心に本調査を概括する。

今次調査の 8 世紀代の竪穴建物跡は、辺長 4.6 × 5.2m の R A 048 竪穴建物跡を最大に、一辺 3～5m の範疇に収まる。これを過去の調査例にあわせて規模の分布をみると、一辺約 5m 以上・床面積 25㎡以上の大型住居、一辺 4～5m・床面積 14～25㎡の中型住居、一辺約 4m 未満・床面積 14㎡以下の小型住居に類型化される（第 22 図）。今次調査例では、R A 045・046 竪穴建物跡が小型住居、それ以外の 4 棟が中型住居に相当する。

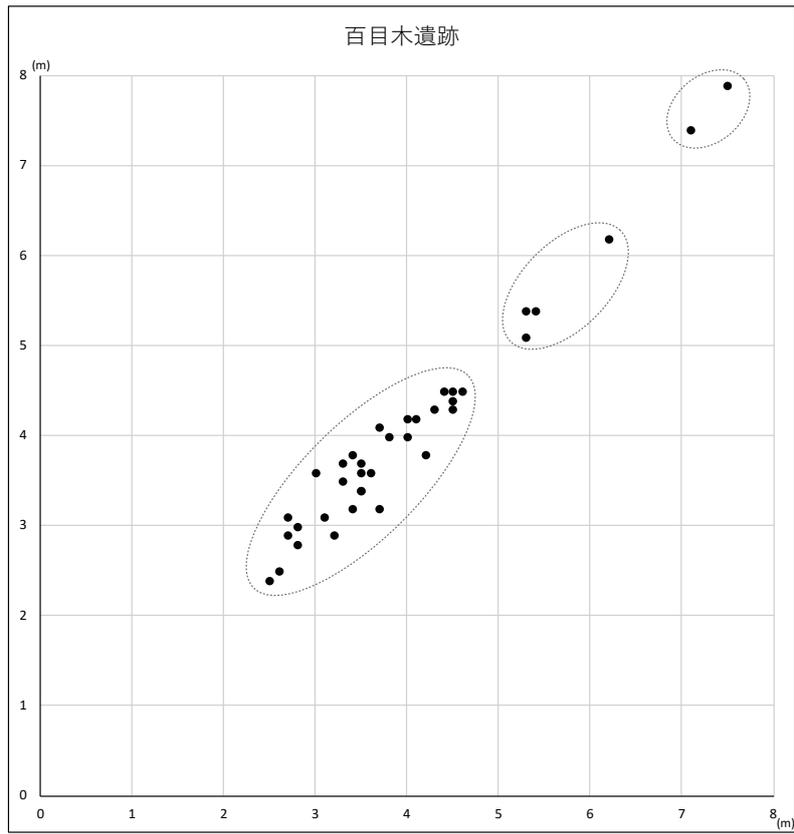
これを本遺跡に近接する同時期の遺跡である百目木遺跡及び高櫓 A 遺跡と比較する。高櫓 A 遺跡では、一辺 5m 以上・床面積 25㎡以上の大型住居、一辺 4～5m・床面積 16～25㎡の中型住居、一辺 4m 未満・床面積 16㎡未満の小型住居に分類される（第 22 図）。一方、百目木遺跡では、一辺 7m 以上・床面積 50㎡以上の大型住居が突出しており、以下、一辺 5～6m・床面積 25～40㎡の中型住居、一辺 5m 未満・床面積 20㎡以下の小型住居に分類される（第 23 図）。西鹿渡遺跡の規模の分布は、隣接している百目木遺跡のそれと比して、突出した規模の住居が認められず、各規模間の乖離も顕著ではなく、散在的に分布している。その様相は、高櫓 A 遺跡に類似している。大型住居は、血縁集団の家父長層の住居と想定されるが、本遺跡においては、百目木遺跡のような突出した家父長層が不在で、比較的等質的な集団であったことを示唆するものである。

今次調査結果の今一つの特徴は、カマド方向が、南カマドの竪穴建物跡が主体をなしている点である（第 24 図）。盛岡周辺の 8 世紀代の集落では、北～西カマドが大勢を占める点が特徴である。強い形制のもと、集落が形成されていたと推測できる。本遺跡においても、従前の調査では、80%が北～西カマドになっている。今次調査では、R A 048 竪穴建物跡が北カマドで、それ以外の 5 棟は南カマドである。約 1,600㎡の範囲に、これだけ南カマドの竪穴建物跡が集中しているのは、異質な感じが否めない。これが当該地における局地的な事象なのか、本遺跡全体の様相の一端なのか、という点については、類例の増加を待って検討しなければならないが、遺跡全体に通有するとすれば、緩やかな形制のもと、集落を形成した集団である、あるいは、カマド志向が異なる血縁集団で集落が構成されていた、と想起される。

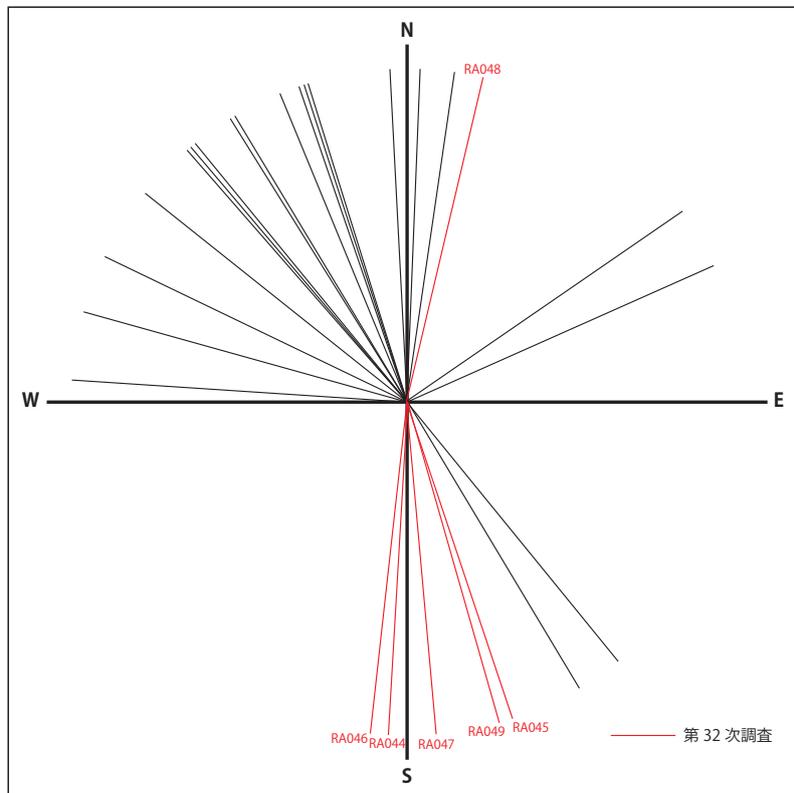
本遺跡の調査は、個人住宅建築等に係る小規模面積の発掘調査や試掘調査が大勢を占めており、遺跡の様相については、明確にし得ない部分も多い。特に、遺跡西側部分は類例に乏しく、様相が判然としない。集落の形成範囲や展開の様相、隣接する遺跡との関係性等、解明が待たれる課題は多いが、さらなる知見の増加を待って、後考を期すこととしたい。



第 22 図 西鹿渡遺跡・高櫓 A 遺跡・百目木遺跡 住居規模散布図 (1)



第 23 図 西鹿渡遺跡・高櫓 A 遺跡・百目木遺跡 住居規模散布図 (2)



第 24 図 西鹿渡遺跡 竪穴建物跡 カマド方位分布図

写真図版



第32次調査区 遠景（南から）



第32次調査区 全景（南から）

第1図版 第32次調査区 全景



完掘全景（北から）



カマド全景（北から）



土器出土状況（北から）



完掘全景（北から）



カマド全景（北から）



土器出土状況（北から）



完掘全景（北から）



カマド全景（北から）



土器出土状況（南から）



土器出土状況（北から）



土器出土状況（南西から）



全景（北から）



カマド全景（北から）



土器出土状況（北から）



調査風景



完掘全景（南から）



カマド全景（南から）



土器出土状況（南西から）



完掘全景（北西から）



カマド全景（北西から）



土器出土状況（北から）



完掘全景（北から）



カマド全景（北から）



土器出土状況（北東から）





完掘全景（北から）



カマド全景（北から）



土器出土状況（北から）



第10图版 RA 044・045 豎穴建物跡 出土土器



第11图版 RA 046・047 竖穴建物跡 出土土器



第12図版 RA 048 豎穴建物跡 出土土器



第13图版 RA 049～051 豎穴建物跡 出土土器

報告書抄録

ふりがな	にしかどいせき							
書名	西鹿渡遺跡							
副書名	「M Stage 三本柳」宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書							
編集者名	菊地 幸裕・今松 佑太							
編集機関	盛岡市遺跡の学び館							
所在地	〒 020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋 13-1 電話 019-635-6600							
発行機関	廣瀬 忠夫・盛岡市教育委員会							
発行年月日	2018年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしかどいせき 西鹿渡遺跡 (第32次)	いわてけんもりおかしきんぼん 岩手県盛岡市三本 やなぎ ちわり 柳2地割 33-2	03201	LE27-1046	39° 39' 52"	141° 09' 47"	20170515 ～ 0728	1,624	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西鹿渡遺跡 (第32次)	集落跡	奈良時代 平安時代	竪穴建物跡 6 棟 竪穴建物跡 2 棟		土師器・須恵器・あか やき土器 コンテナ 6 箱			
要約	本遺跡は、これまでの調査で、奈良・平安時代の竪穴建物跡が 40 棟以上確認されている集落遺跡である。本調査においても同時期の竪穴建物跡が 8 棟検出された。南カマドを有する中・小型規模の住居を主体とし、当地域における該期の様相を解明する資料の一つとなった。							

西鹿渡遺跡

－「M Stage 三本柳」宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書－

平成30年3月25日 発行

編集 盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13-1
電話 019-635-6600 FAX 019-635-6605
e-mail iseki@city.morioka.iwate.jp
URL [http://www.city.morioka.iwate.jp/moriokagaido/
rekishi/manabikan/index.html](http://www.city.morioka.iwate.jp/moriokagaido/rekishi/manabikan/index.html)

発行 廣瀬 忠夫・盛岡市教育委員会

印刷 株式会社 光文社
〒020-0106 岩手県盛岡市東松園三丁目12-1
電話 019-661-3441 FAX 019-661-3434
